

権力の犬

〜誰よりも素敵なあなた〜

作・演出 萬野 展

登場人物

発言者1〜7 プロローグに登場するナレーター軍団。

米倉清美 よねくら きよみ マイフロコスト社員。三十二歳。(杉山美奈)

松岡庸介 まつかみ ようすけ マイフロコスト社員。二十六歳。(松山聖一)

福本良太 ふくもと りょうた マイフロコスト社員。二十七歳。(佐久間政吾)

鼓龍彦 つひみ たろうひこ 六乗大学一年。生物研究会部員。(中條竜弥)

堤美佐 つみみ 六乗大学一年。生物研究会部員。(小倉涼子)

遠藤利春 とほはら りしはる 六乗大学二年。生物研究会部長。(辻崇史)

塩月由紀夫 しほつき ゆきお 六乗大学二年。犯罪研究会部員。(白井順也)

東海林香 とうかいりん かおり 六乗大学三年。犯罪研究会部員。(佐々木智秋)

遠山卓 とほやま たく 六乗大学助教授。犯罪研究会顧問。三十三歳。(内田斉一郎)

三木昌子 みつき まさこ 六乗大学二年。演劇研究会部員。(大石紗綾香)

深浦栄 ふかいうら けい 六乗大学三年。演劇研究会部員。(河野高典)

薄田敦子 うすきた あつこ 六乗大学三年。演劇研究会部員。(石田愛)

鏡木修 かがらぎ ありむね 六乗大学一年。アウトドア研究会部員。(斎藤邦男)

湯浅二郎 ゆあさ じろう 六乗大学八年。アウトドア研究会部員。(早矢仕裕之)

黒沼靖 くろぬま せいし 六乗大学八年。アウトドア研究会部員。(宇野善敬)

笹川一志 ささがわ かずし 老人医学研究所所員。二十七歳。(村上佳久)

渋谷仁 しぶやじん 老人医学研究所所員。二十五歳。(有原雅)

樋口倫子 みちこ 老人医学研究所所員。二十九歳。(夏野都要子)

近衛和夫 このえ 老人医学研究所顧問。三十八歳。(浅田啓治)

高村櫻 たかむら メゾン六乗の住人。美容師。二十三歳。(宮崎奈々)

野間慎太郎 のま しんたろう メゾン六乗の住人。フリーター。二十二歳。(塩津聡)

藤村操 ふじむら メゾン六乗の住人。タトゥー職人。二十歳。(横田七生)

成嶋俊平 なるしましゅんぺい 刑事。三十二歳。(檜垣秀行)

森戸吉行 もりとよしゆき 刑事。三十四歳。(淵谷浩之)

瀬川数成 かずしげ 法務大臣の息子。二十三歳。(小川富美一)

タロ どこからともなくやってきた野良犬。犬齢不明。(大橋秀和)

【注記】当脚本の著作権は萬野展が保持する。当脚本の無断上演を禁ずる。

遅かれ早かれ、われわれは勝利する。

サパティスタ民族解放戦線指導者

プロローグ 七人の発言者

観客が劇場に足を踏み入れた瞬間から、芝居は始まっている。

舞台上には本を読む者、音楽を聴く者、携帯電話に見入る者たちが、思い思いの姿勢で、石像のごとく佇立している。

客入れの音楽もなく、ただ時折、舞台上の人物が本のページをめくる音、ウォークマンからかすかに洩れる音などが意識されるのみである。

舞台は客席とともに、非常にゆっくり、観客も気がつかないほどゆっくりした速度で、暗くなっていく。

劇場が完全に暗くなるのとほとんど同時に、音楽とともに突如として芝居は始まる。

舞台上全員が同じ姿勢のまま、顔だけを客席にまっすぐ向けている。
(これらの人物たちを便宜上「発言者」と名づける)

発言者たちは無駄な動きをまったく見せずに、ただ客席をまっすぐに見たまま、鞭を打つような冷徹な声で発話しはじめる。

発言者1 物語を始める前に、人類の歴史について簡単に整理しておこう。我々に与えられた時間は七分である。

発言者のひとり(6)が、カチリとストップウォッチをスタートさせる。

発言者2 観客の理解を助けるため、地球が生まれてから今この瞬間にいたるまでの時間を一年にあてはめて説明する。この説明のなかで一ヶ月はほぼ四億年弱に相当することに留意されたい。

一月。

発言者3 一月一日午前零時。地球誕生。空も海も土もなく、もちろん生命の息吹もなく、ただ形を与えられた星間物質が重力という途方もない権力に囚われて渦を巻いていた。今から四十六億年前のことである。

二月。

発言者4 二月中旬、海が現れ、生命の源が生まれる。

三月、四月。

発言者5 四月下旬、最初の微生物が出現。

五月。

発言者6 続いて光合成を行うラン藻類が出現。以後、地球の大气に酸素が増え始める。

六月、七月。

発言者7 七月下旬。酸素を大量に含んだ大気層が完成。無酸素状態で増殖してきた大部分の生物は絶滅の危機に瀕する。

発言者1 酸素を有効に利用できる微生物が出現。その微生物との共生により、生物は絶滅を免れる。現在のミトコンドリアである。

八月。

発言者2 八月。細胞に核を持った生物が登場し、大量の遺伝子を蓄えることが可能になる。

九月。

発言者3 核を持った細胞が寄り集まることで、多細胞生物が発生。動物と植物の共通の祖先が生まれる。九月下旬のことである。

十月、十一月。

発言者4 十一月下旬、原始の海の底で、爆発的な進化が始まる。二葉虫、ウミサンリ、甲青魚、あらゆる形が試され、捨て去られ、海は進化の実験場と化す。

発言者5 十一月二十八日、脊椎動物が出現。

発言者6 十一月二十九日、植物が陸上に進出。

発言者7 十一月三十日、続いて動物が陸上に進出。

十二月。

発言者1 十二月一日、ついに脊椎動物が陸上に進出する。

発言者2 十二月二日、地上を森林が覆い尽くし、昆虫、爬虫類が生まれる。

発言者3 十二月十一日、進化を繰り返した爬虫類が、恐竜を生み出す。恐竜がその権力を振るい続けるなか、十二月十五日、ひっそりと哺乳類が誕生する。

発言者4 十二月二十五日、繁栄を極めた恐竜族が突如として絶滅。

発言者5 主のいなくなった大陸を舞台に、哺乳類の発展が始まる。

発言者6 順調に発展をとげた哺乳類は多種多様な生物を生み、そして十二月三十一日、午後八時零分。

発言者7 人類が誕生する。

発言者1 直立歩行、コトバの発生、道具の発明を経て、人類は農耕に始まる文明を持つに至る。時すでに十二月三十一日午後十一時五十九分である。

発言者2 文字が発明され、歴史を記録することが可能となる。

発言者3 五十九分十秒。

発言者4 共同体が発生、社会生活がはじまる。

発言者5 五十九分二十秒。

発言者6 神の権威を借りて王と奴隷が生まれ、さまざまな文明圏が生まれては消えていく。

発言者7 アシユール、オーリニヤック、グラヴェト、マルタ、アフォントヴァ、縄文早期、縄文中期…

発言者1 五十九分三十秒。

発言者2 権力の集中は帝国を生み出し、巨大な権力が集合離散を繰り返す。

発言者3 バビロニア、ミタンニ、アッシリア、殷、周、ヒッタイト、フリギア、ヘブライ、エジプト、ペルシャ、ローマ…

発言者4 五十九分四十秒。

- 発言者5 ローマ帝国が西アジアを席巻。始皇帝が秦を、高祖劉邦が漢を建国。
- 発言者6 カッサンドロス、ハンニバル、フィリップ、プトレマイオス、チャンドラ・グプタ、ボクトゥゼンウ、孔子、荀子、董仲舒、司馬遷…
- 発言者7 五十九分五十秒。
- 発言者1 ローマ帝国崩壊。以後ヨーロッパはさまざまな国が生まれては消える。
- 発言者2 西ゴート、ヴァンダル、フランク、ランゴバルド、イングランド、サラセン、隋、唐、百濟…
- 発言者3 キリスト、クロビス、レオ、ユスチニアヌス、マホメッド、ヤズデギルド、聖徳太子…
- 発言者4 五十一秒。
- 発言者5 最後の世界宗教であるイスラム教が発生。ローマを倒したゲルマンの子孫たちがヨーロッパに満ちあふれ、アジアでは唐が世界規模の帝国を打ち立てる。
- 発言者6 ピピン、アリヴァルド、ムアヴィア、アルデシール、ヴァルダナー、藤原鎌足、クトウルク、玄奘、則天武后…
- 発言者7 ブルガル、吐蕃、突厥、渤海、カルク、コルドバ…
- 発言者1 五十二秒。
- 発言者2 隆盛を誇ったフランク王国が分裂し、のちのフランス、ドイツ、イタリアの原型を形成する。西の大帝国唐にも衰退の影がさし東南アジアに新興国が多発する。封建制度が人類の新しい権力の姿として威力を振るいはじめる。
- 発言者3 オットー、エドワード、ヨハネス、ルイ、チャールズ、ラージャシェーカラ、クリシュナ、朱全忠、藤原良房、坂上田村麻呂、平将門…
- 発言者4 ツルーン、ウイグル、ターヒル、カンボジア、ビルマ、ペグー、新羅、サファール、神聖ローマ、ブワイ、ガズニ、宋、高麗…
- 発言者5 五十三秒。
- 発言者6 ローマ教皇の絶大な権力が欧州を覆い、西アジアの分裂を宋が統一。君主独裁のもと、官僚制国家が発生する。
- 発言者7 ユーグ・カペー、カヌート、ロベール、ヒルデブランド、ファルクザード、王安石、藤原道長、紫式部…
- 発言者1 デンマーク、フランス、ポーランド、ハンガリー、ブルガリア、ファティマ、セルジुक・トルコ、ジャワ、西夏、契丹…
- 発言者2 五十四秒。
- 発言者3 十字軍によるサラセン帝国との闘争を経て、ヨーロッパは中世に突入。アジアでは最強の戦闘民族モンゴルが中国を蹂躪し、元帝国を建国。
- 発言者4 五十五秒。
- 発言者5 アルモハード、グラナダ、キエフ、コラズム、カラキタイ、ゴール、金チャガタイ、元…
- 発言者6 ギヨーム、ラインマル、マルコポーロ、トマス・アクィナス、チンギス汗、親鸞、道元、北条時貞…
- 発言者7 五十六秒。
- 発言者1 商業資本が、将来の覇権を唱えるべく蓄積を開始する。中世から近世への激動と、その反動としてのルネッサンスのあと、教会権力からの脱出がはじまる。

発言者2 ポルトガル、イスパニア、モスクワ、タタール、チムール、ムガール、

李氏朝鮮…

発言者3 メジチ、イワン、ハプスブルグ、マゼラン、足利義満、武田信玄…

発言者4 五十七秒。

発言者5 絶対主義権力が最後の猛威を振るうなか、数多くの戦争と革命を経て人類は地球上に覇権を確立していく。

発言者6 クロムウェル、レンブラント、ニュートン、市川団十郎…

発言者7 オランダ、ロシア、トルコ、女真、明、清…

発言者1 五十八秒。

発言者2 産業革命の進行とともに、人口、交通、経済の急激な膨張が始まる。自由主義の名の下、個人の尊厳という最新の権力が台頭する。

発言者3 ナポレオン、シューベルト、ロッシニ、スタンダール、カント、本居宣長、

まつだいらたけのぶ
松平定信…

発言者4 オーストリア、プロシア、バタヴィア、アメリカ…

発言者5 五十九秒。

発言者6 自由主義が世界を支配し、価値観は限りなく均質化し、民主主義という最強の権力が国家を超えて全世界を鷲掴みにする。

発言者7 ソビエト連邦、大日本帝国、中華民国、パキスタン、ドイツ帝国、ドイツ共和国、韓国、イラン、日本、中華人民共和国、イスラエル…

発言者1 リンカーン、ジョンソン、ロッキフェラー、エジソン、ルーズベルト、アイゼンハワー、ケネディ、ニクソン、レーガン…

発言者2 ダーウィン、ビスマルク、ドストエフスキー、ノーベル、ワグナー、モールス、ベル…

発言者3 セザンヌ、西郷隆盛、正岡子規、野口英世、内村鑑三、湯川秀樹、鳩山一郎、田中角栄…

発言者4 ドレフェス、ナイチンゲール、スペンサー・トレイシー、マリリン・モンロー、袁世凱、カストロ、ベルクソン、スターリン、蒋介石…

発言者5 ヘッセ、ド・ゴール、石原裕次郎、芥川龍之介、芥川隆行、柏原芳恵、原節子、ジョージ・ラフト、三木のり平、ハーポ・マルクス、グルーチョ・マルクス、チコ・マルクス、ゼツポ・マルクス…

発言者6 ハリソン・フォード、鈴木清順、三原順、ピーター・ローレ、ローレン・バコール、ボブ・デylan、マルセ太郎、舞ノ海、北ノ湖、武蔵丸…

発言者7 ソフィア・ローレン、大橋巨泉、ピーター・フォンダ、フセイン、安部工房、里中満智子、アントニオ猪木、淡谷のり子、プリンス、ゴダール、ジュリア・ロバーツ、久保純子…

カチリ、と、巨大な時計の針が合わさるが響く。
沈黙が訪れる。

発言者1 零時零分零秒。

発言者2 すなわち現在。この瞬間から、物語は始まる。

発言者3 そしてこの物語は、

発言者4 一匹の名もない犬の物語である。

舞台中央に、犬が（もちろん人ですが）登場する。
模様は白黒のフチ。直立歩行。目をパチクリしてあたりを見回している。

発言者5 なんの変哲もない一匹の犬。

発言者6 この犬がやがて世界を変える運命にあることを、まだ誰も知らない。

発言者7 まだ名前のないこの犬に、便宜上の呼び名を与えておこう。この犬の名は…

発言者1 ポチ、ジョン、ブッチ、ロッキー、キラー、ウルファイ…

発言者2 シロ、クロ、シロクロ、クロシロ、モノクロ、ノラクロ、ノラクラ、ノラ、

ノラリクラリ…

発言者3 ジョセフィーヌ、ミルフィーユ、カルペンティエール、キュイジーヌ、フ

ランシーヌ…

発言者4 ヤマト、ナルト、ハナ、ハナコ、ノンノ、プチセブン…

発言者5 ゴン、ゴンタ、ゴンスケ、ゴンノスケ、ゴンベエ、ゴンドラマンゴラ…

発言者6 曙、貴ノ花、貴闘力、力道山、昭和^{しやうわ}新山、海原^{うみはら}雄山…

一斉に喋り出す発言者たちを、発言者7が声をあげて制する。

発言者7 …この犬の名はこれから登場する人物たちに任せることとしよう。それで

は物語を始めることとする。

発言者1 最後に、われわれ七人は、この物語のなかの登場人物として、いずれ再び

お目にかかるであろうことを、ここで予告しておく。

発言者たち その節はよろしく。

ストップウォッチを持った発言者が、カチリ、とそれを停める。

発言者6 七分経過。

音楽とともに、転換明かりのなか、発言者たちは犬を残して去っていく。
なおこの芝居では、少数の例外を除いて、場面転換には転換専用の照明を用い、暗
転を使用しないこととする。

犬は相変わらず中央に立ちつくし、世界を興味深げに見回している。

ACT-1 誘拐事件

一・五流どころの私立六乗大学ろくじょう楓野キャンパス。
大学構内にある薄汚れたサークル棟のなか。
劇研ゲキケンと呼ばれる演劇研究会の部室に、犬は立っている。

そこへ劇研部員深浦栄登場。

深浦
：。

犬
：。

深浦
：。

お互いを意識した無用な沈黙。

犬はちよつと会釈したりしている。

深浦はポーツとしている。

犬 深ちゃん。

深浦
：。

犬 なんていうかつ、ホントにどうもありがとっつ！

深浦
：。

犬 助けてもらっっちゃって！

深浦
：。

犬 なんか、なんていうか、この恩は忘れないからっ！

深浦 いや、まあ。

犬 ホントにさ、なんか怪我まで治してもらってさ、もう、こんなに親切にしても

らったことないからさっ、僕さっ、してもらったことないんだよねっ！ ずっ

とさ、ずっ

犬はだんだん深浦に近づいていく。

深浦は困ったように、ややおびえたように退いていく。

深浦 ちよつと、ちよつと落ち着ちよつといよ。

犬 ずっとね、ずっとね…、あ、虫。

犬、飛びつくように床を叩く。

驚いてなにやら八工のような虫が飛んでいくらしいのを、夢中でおいかける犬。

犬 えいつ！ そっちか！ たあっ！ すばやいな！ よーしよし、今度こそ…ていつ！…

むむむー…まいつか。虫は無視しようっ、と見せかけておりゃっ！…

よーし（狙いをつけている）

深浦 …（黙って窓をあける。虫が窓から逃げていったらしい）

犬 …（真剣に窓の外をみつめている）

深浦
：。

犬
：。

やや沈黙。

犬 …（深浦を見ている）

深浦 そっそっ、落ち着いてな。

犬 なんの話してたっけ？

深浦 うんうん、いいからいいから。

犬 あれ、なんか大事なことしゃべってよね僕？ 大事なこと。大事なこと？ 大事なことってなんだっけ？ なんか大事なことがあるんだよ。ホントだよ！

深浦 しーっ。
犬 … ホントなんだ。大事なことがあるんだ。あつたんだ。なにか…：…なんだっけなあ…：…なんだっけなあ…：…

… ブツブツ呟き続けている犬を尻目に、深浦は週刊誌を読んだりしている。

犬 大事なことといえは…：…ご飯かな…：…。そうだ、ご飯…：…。ご飯だよ！ なんとってもご飯は大事だよ。ね。ねっ。ご飯を食べよう！ いっしょに食べよう！ 食べよう！ 食べよう！ 食べよう！

深浦 だから静かにしてろってば！

犬 …。

そこへ劇研部員三木昌子登場

三木 深浦さん。

犬 あっ。女の人だっ！ 女の人だよ！

深浦 しーっ！

犬 女の人。

三木 こんにちは。タロちゃん。

犬 …？

三木 なんか今、すっごく吠えてませんでした？

深浦 うん。

三木 学食まで聞こえてましたよお。

深浦 窓開けたからね。

三木 深浦さん、なんか悪戯したんじゃないですかあ？

深浦 別に。

三木 じゃあ、きつとお腹空いたのかな？

深浦 そうなんじゃない。

犬 なんだっけなあ…：…。

三木 ホラ、そうだって。

犬 ええっと…：…。思い出せないなあ…：…。

三木 そうよね、タロちゃんはお腹空いたのよねえ。

犬 …。

三木 深浦さん、お腹空いてませんか？

深浦 ん？

三木 いっしょに食べに行きませんか？ あたし午後は授業ないし。深浦さん授業は？

深浦 …：…さあ。

三木 すっごくおいしいお店見つけたんですよ。深浦さん好みの。

深浦 君、もう食べたんじゃないの？

三木 どうしてえ？

深浦 学食にいたんだろ？

三木 コーヒー飲んだだけ。もしかして深浦さんいるかもって思って…

深浦 あそう。

三木 行きましょつよ…。

犬 (突如として) そうだっ！ 昌子さんだっ！

三木 …！ (ビックリ)

犬 昌子さんっ！ この女の人は昌子さん。昌子さん、ホントにどうもありがとうっ…

三木 なに、なによ。うるさいわねアンタ！

犬 助けてもらつてさ、僕さ、僕絶対忘れないよっ、昌子さんが包帯巻いてくれたんだよねっ！ 僕、一生忘れないからねっ！ 僕っ…

三木 なに興奮してんのよ、静かにしなさい！ 今日にはなにも持ってないの！ あんたのエサなら敦子さんが持つてくるわよ！

犬 エサじゃなくて、包帯巻いてくれたよ！ 僕覚えてるよ。僕怪我して倒れてたんだ。それで…それでっ！

三木 吠えるなって言ってるんでしよう！

犬 …それでどうしたんだっけ？

三木 まったくもっ…。

深浦 三木くんさあ…。

三木 ハイ。

深浦 今の、芝居？

三木 なにが？

深浦 俺を誘惑しようっていうの、芝居のつもり？

三木 …。

深浦 君が四月に劇研入ってからもうすぐ一年経つけど、その間に…えーと、何人やめたんだっけ…

三木 …。

深浦 ま、別に誰がやめてもいいんだけどね、俺は。でもその程度の小芝居じゃ俺は落ちないから。

三木 …。

深浦 俺、メシは食ったから。さつき学食で。君と同じA定食。

三木 …あたしの…

犬、きよろきよろしている。

三木 …あたしのせいだっって言つんですか…みんながやめたの…。

深浦、涙ぐむ三木をクールな目で見ている。

犬が、突如としてパーンと床を叩く。

虫がまた入ってきたらしい。

犬 (床を叩いた手をそのままに)……なんだっけなあ…。

そこへ劇研部員薄田敦子、生物研究会(略称生研)部員遠藤利春とともに登場。薄田は手には犬のエサらしきものを持つている。

薄田 はよっす。

深浦 ういっす。

遠藤 どうも。深浦さん。あのー…ですね…。

薄田 ほれ、ジョン、エサだよ。

考え込んでいる犬、ビクツとして飛び起きる。

犬 エサ…？

薄田 …（状況を見て）なに。三木、あなた、今度は深ちゃん落とそつっての？ ちょっといい加減にしてよね。あなた部員何人減らしたら気が済むか？

三木 知りません。わたしのせいにはしないでください。

薄田は犬のエサを準備してやっている。
犬は目をカッと見開いてそれを凝視している。

薄田 はいはい。あなたは無意識なのよね。ただどね、そついうのが一番…

深浦 部長。

薄田 ああ、遠藤くんがいたのか。…部外者の前で、ゴメン。

深浦 トシちゃんさ、こないだのビデオどうなったの？

遠藤 あ、アレできてます。できました。

深浦 なによ、できたんなら持って来てよ。せつかく協力したんだからさ。

遠藤 いやあ、面目ない…なにセダビングする予算が…イヤ、それどころじゃないんですって！

薄田 ええクソっ。これ開かない。遠藤くんこれ開けてくれない。

遠藤 はあ…。

遠藤の手に犬餌缶詰と缶切りが渡る。
犬の熱い視線は遠藤に移る。

薄田 なによそのビデオって。

深浦 オリに使うプロモだって。

薄田 プロモあ？ 生物研究会がなにをプロモーションすんの。カルカンの開け方？

遠藤 まあ、いろいろ…ウチは去年新人ゼロだったんで…。いや、それどころじゃなくですすね！

薄田 深ちゃん、それ出たの？

深浦 うん。けつこう面白かった。部長、知ってます？ 地球の歴史を一年とすると

人類が生まれたのは十二月二十…えーと…

薄田 はあ？

深浦 なんだっけトシちゃん。

遠藤 だから！ それどころじゃないんです！ 警察がですすねえ…！

犬 警察！

遠藤 うわ。びっくりした…。

犬 警察！ 警察！ 警察！ なんか…、なんか大事なこと…。

薄田 ホラあ、あなたが早くそれ開けないから。

遠藤 いや、だってこれ、錆びてますもん。

犬 警察…なんだっけなあ…なんだっけなあ…

薄田 他に缶切りなかったっけ？ 三木。あんたいつまでブータレてんの。
 三木 別にブータレてません。
 薄田 あそ。この部屋に缶切りなかったっけ？
 三木 さあ。
 犬 なんだっけなあ…なんだっけなあ…
 薄田 早く開けないとアンタに飛びかかるかも。
 遠藤 だいたいなんで僕が…！
 鼓 鼓 失礼します。あ、いた。
 堤 堤 ごめんください。
 薄田 あ。
 鼓 深浦さん、こないだはどうもありがとうございました。
 堤と鼓、揃って頭を下げる。
 深浦、手を上げるだけの挨拶をする。彼はすでに週刊誌に戻っている。
 堤 部長、ミーティングって言ったのに。
 遠藤 ああ…いや、それどころじゃ…
 薄田 えーとね、これは、これはね…これがね…
 鼓 はい。
 薄田 ……堤くん。
 鼓 薄田さん…これで三回目です。
 薄田 またやったか…
 鼓 五回でA定食っていうの、覚えてますよね。
 三木 ツツミくん、よね。
 鼓 あ、はい、そうです。太鼓の、あの、ツツミのやつ、あの…
 堤 なに言ってるの？
 鼓 いやあ、覚えてもらえたんだあ…。うれしいなあ。
 堤 (咳払い)…。
 三木 で、こちらが…。
 堤 ツツミ、です。
 薄田 どうして逆になるかなあ…。だいたいアンタたち、いつもふたり揃って来るんだから。
 堤 …え、そんな…別になんにも、そんなつもりないんですけど。
 遠藤 なに照れてんの？
 堤 部長には関係ありません。
 鼓 いやホント、偶然ですよ。たまたま！
 遠藤 なんて昌子ちゃんに言うの？
 鼓 部長には関係ないです。
 遠藤 …。
 薄田 遠藤くん。君、苦勞してるんだね。
 遠藤 …。
 犬 さびしそうだ。

遠藤 …。

薄田 慰めてくれてるよ。

遠藤 …。

深浦 早く缶開けてくれてって言うてるのかも。

犬 元気だそうよ。

遠藤 …。

堤 元気になったんですね、この犬。

薄田 うん、まあ、なんとかね。

堤 ポチ。どう？ 痛いの直った？

犬 うん。ありがと。ポチってなに？

堤 そう、よかったねえ。

深浦 ひとつ質問があるんだけど。

犬 はい、どうぞ。

薄田 はい、深浦くん。

深浦 こいつ、ホントはなんなの？

一同 …。

一同、首をひねっている。

遠藤はキョトンとしている。

堤 ポチですよ、今自然な感じで返事したじゃないですか。

三木 タロよ。そう呼ぶと必ず振り向くもの。

薄田 馬鹿だねえ、ジョンに決まってるでしょ。

鼓 なにを根拠に？

薄田 昔っから犬はジョンって決まってるんだよ。

三木 それが根拠ですか。

遠藤 なんの話？

鼓 名前分かんないから、いろいろ呼んでみて反応を見る作戦です。

遠藤 ああ…。

鼓 な、ジロ。

犬 覚えてないんだ。僕。

鼓 あ、ホラ。

三木 タロ。

犬 ホント言うと、忘れちゃってるんだ。

堤 ポチ。

犬 僕、どこかに倒れてたんでしょ？

堤 ほらあ、やっぱ今の反応でしょう。

薄田 ジョン！

犬 そこに行ってみたらなにか思い出せるかもしれないけど…

遠藤 おお、長いぞ反応が。

薄田 なっ！

鼓 ジョージ。

犬 僕はひどい怪我をして倒れていた、そうだよな？

鼓 長さ同じじゃないですか。

三木 「ジョ」の音に反応してるのかも…

遠藤 しかしよく律儀に反応する犬だな…。

堤 ジョリー。

犬 それはほんやり覚えてる。

三木 ホントね。

薄田 ジョレス。

犬 でもその以前のことか…

堤 ジョバンニ。

犬 思い出せないんだ…。

三木 ジョアンナ。

犬 なにか大事な…

薄田 ジョツプリン。

犬 大事なことだったんだよ…。

鼓 ジョルジュ。

犬 とても…。

犬、想いに沈む。

遠藤 (思い切って)…ジャン・バプティスト・ラマルク。

犬 …。(沈んでいる)

一同 …。

深浦 黙ってしまいました。

薄田 遠藤！ おまえだろう！

鼓 部長、「ジャ」じゃなくて「ジョ」。

三木 だいたい誰なのよそれ？

遠藤 いやあ、とても有名な生物学者であって…

堤 普通の人は知らないわよね。

薄田 知らん！ 完全に知らん！

鼓 部長、場の雰囲気ってものを考えましようよ。

遠藤 だいたい僕はこんなことをしにきたんじゃないんだ！

堤 だから生物オタクって言われるんですよ。

三木 なんか用があつてきたんだ？

遠藤 だからさっきから言ってるでしょ、警察がですねえ！

薄田 警察？ 警察って何のことよ。

大騒ぎの中、二人組みの刑事森戸吉行、成嶋俊平登場。

森戸 えー、ごめんなさい。

一同、喧喧譁譁とやっついていて気がつかない。

犬だけが、ピクリと反応して刑事のほうを見つめている。

森戸 えー、ごめんなさいよ。

声のポリウムが上ががり、一同は刑事たちに気づく。

一同 …。
森戸 盛り上がってるところどうも。(警察手帳を掲げる)警察です。

一同 …。
森戸 展開の順序として(遠藤を示し)彼の前振りか済むまで外で待ってたんですが、いつまでたっても先に進まないの、出てきちゃいましたあ。

一同 …。
三木 (小声で)立ち聞きしてたってこと？

森戸 立ち聞きされて困るようなお話ではないということが、立ち聞きした結果よくわかりました。…警視庁の森戸です。彼は成嶋。

成嶋 成嶋です。

犬は刑事ふたりを見つめている。
森戸は、すると部屋の中に入ってくる。
犬の前に立ち、顔を覗き込む。

犬 …。
森戸 ジャームツシュ。

犬 …それなに？
森戸 (満足げに頷き一同に)ファンなんです。ジム・ジャームツシュ。特に「ダウン・バイ・ロー」。若き日のエレン・バーキンが出ている。ファンなんです。知ってますか。エレン・バーキン。生物学者ではありませんよ。

成嶋 森戸さん。
森戸 あああこりゃ失礼。つい喋り過ぎる。ええと、それでは、と。彼は。

遠藤 はへ？
遠藤 遠藤さん。さっき正門のところでお話しましたねえ。

遠藤 はひ。
森戸 さあ皆さん、もう彼の腰を折るのはやめて、彼がさっきから伝えたがっているメッセージを聞きましょう。彼は実に誠実ないいヤツです。さあ遠藤くん！

遠藤 …。
森戸 どうした遠藤くん！ さっきから君が言いかけていたことがあるだろう！ それを最後まで言ってみよう！ 今！ ナウ！ ゴー！

ひとり歩き回り悪ぶざげをやめない森戸が、成嶋の耳元にささやく。

森戸 なんか文句ある？

成嶋 …。
森戸 これが俺のやり方なんだよ。

成嶋 …。
森戸 時間の無駄って言いたいのかなあ？

成嶋 別に

森戸 ああ？
成嶋 別に…
森戸 聞こえねえなあっ！…聞こえないぞ遠藤くん！

犬 …。
森戸 …。

犬 その人をいじめるな！

森戸 ホラ、ジャームツシユも聞きたがっている、遠藤くん！

犬 僕はそんな名前じゃないよ！

森戸 ホラ、ジャームツシユも痺れを切らしている、さあ遠藤くん！ さっきなんて言っただけ！

遠藤 け、警察が…

森戸 警察があ！ その先は！

遠藤 さがして、る。

森戸 探してるウ！ 誰を！

遠藤 ふ、ふかうら…さん…を。

一同驚く。

深浦 …え、俺？

森戸 （遠藤の耳元で）もうちょっとはつきり喋んな、オタク野郎。

遠藤 …。

深浦 おい、ちょっと待てよ。

成嶋 逮捕じゃないよ。参考人だ。

森戸 ブー。重要参考人だ。いいかげんなこと言つな。

犬 その人をいじめるな。

森戸 県警じゃそんなことも教えてもらえないのかねえ。

成嶋 …。

犬 いじめるなつてば！

森戸 わかったわかった。さて、と。深浦栄くん。任意同行だけど逃げないでね。ほんじゃ、行こうかね。

森戸、深浦の腕を取る。

薄田 深浦…

深浦 なんかの間違いだよ。…まあ、ちょっと行ってくるわ。

三木 深浦さん！

森戸、深浦を連れ退場。

堤 あの…

成嶋 ン。

堤 なんの容疑なんですか！

成嶋 いや…容疑ってわけじゃないから。

堤 でも…。

成嶋 …誘拐。

薄田 誘拐！？

鼓 あの、誰が…誘拐されたんですか？

成嶋 それは言えない。君たちもあまりこのことを人に話さないほうがいい。

薄田 誘拐事件の…重要参考人？…深浦が？

成嶋 まあ…直接容疑がかかっているわけじゃないから…。あまり心配し過ぎないほうがいい…。

成嶋退場。

一同
∴。

一同の沈黙のなか、犬がまっしぐらに刑事たちを追いかけていく。

明かりが場転用の明かりになり、全員退場。

ACT-2 地下帝国

大学構内の広場のようなところ。

メゾン六乗の住人野間慎太郎登場。
なんとなくキョロキョロしている様子。
手にはチラシのようなものを持っている。

野間
…。

チラシを配ろうとしているらしいが、人が通らない。

野間
… おねがいします。

と小声で言ってみている。
チラシを渡す素振りなどをしている。

野間
おねがいます。… おねがいます。… おねがいます。…

気に入らないらしい。
そこへ深浦を連れた刑事森戸が登場。

野間
…。

ふたりは野間の前を通り過ぎて行く。
野間、なにやら空を見たり時計を見たりしている。
チラシは、渡さない。
深浦、森戸退場。

野間
… うん。なんか、急いでるみたいだったしな。うん。チラシは有効に使わない
とな。うん。よし。さて、じゃあ本気出して、やるか。

そこへ刑事成嶋が登場、通過。

野間
…。

成嶋、野間の前を通り過ぎ、退場。
野間、なぜかしゃがみこんで靴紐を結び直している。

野間
…。まあ、あれはこの学生じゃなさそうだしな。部外者に配っても仕方ない
しな。うん。チラシのコピー代も馬鹿ばかにならないしな。うん。よし。

なにがよしたかわからないが、野間がひとりで納得しているところへ、同じくメゾ
ン六乗住人高村櫻登場。
同様にチラシ束を持っている。

高村
野間くん！

野間
ああ。やあ。(近寄る高村にチラシを差し出し)お願いします。

高村
あたしにお願いでござすんの？

野間
いや、ちよつと練習。

高村
で？ 練習の成果は？

野間
いや、これから。

高村
ちよつとお、ぜんぜん減ってないのお？

野間
いや、今来たばかりだから。櫻ちゃんはバイトいいの？

高村
早引けしてきた。

野間 気合が入っている。

高村 そうよう。住むところの問題だもん。あたしあそこ意外と気に入ってるの。

野間 日当たりは悪いけどね。

高村 うん。…ねえ。操さんは？

野間 いや、まだ来てないみたいだけど。

高村 え、だって門のところで待ち合わせって…

野間 うん、正門のところで十分くらい待ってたんだけど…

高村 正門？ 違うよ、狐門きつねだよ。

野間 えっ。そつなの？

高村 だって操さんアパートにいるでしょ。狐門のほうが近いじゃない。あたしそつ

言っただよ！

野間 あ、そうか…。

高村 もう、ホント、野間くんて…

野間 うん。まあ。…うん。…よし。

高村 なにが？

野間 いや、今、…自分のなかで、こつ…、立ち直ったっていうか。

高村 …。あたしちよつと行ってくるよ。野間くんチラシ配ってて。

野間 了解。

高村 靴紐結んでちゃだめだよ！

野間 見てたんだ。

高村笑って手を振り退場。

野間 見てたつてえ、ワケ、だね。(ひとり言)…さて、やるか。よし。気合だ。よし。

いっこうに気合の入らないテンションで気合を入れるが、誰も通らない。

野間 …誰も通らないな。うん。よし。…いやよくないか。せつかくこうして気合を入れたというのに。むう。よし。いやよくない。なにを言ってるんだ俺は。いかん、たったひとりでひとり言を言っているだけなのになぜが自我が崩壊していきそうだ。よし。いやよくないんだつてば。おい、おまえ。はい。おまえは誰だ。野間慎太郎です。おまえは今どこにいる。六乗大学楓野キャンパス構内です。よし意識はしっかりしてるな。目を見せて。(目を剥く)。目が生きている。よしまだやれるな。ファイト。…なにがファイトだ？

はまっっていく野間をいつのまにか犬が見ている。

野間 お。

犬 …。

野間 犬だ。

犬、野間の前を通り過ぎようとする。

野間 お願いします。

犬 …。

犬、びっくりして立ち止まり、野間の顔をしげしげと見る。

野間　お願いします。

野間、練習のつもりなのか、意外に愛想よく、犬にチラシを差し出している。

犬　…。(チラシを受け取る)

野間　ありがとうございます。地上げ反対！　メゾン六乗を守れ！　高速道路建設による狐の森伐採にみんなで反対しよう！　おー！

犬　なにこれ。

野間　うわ、びっくりした。

犬　なにこれ。

野間　なんだ、おとなしい犬だと思ったら、ちゃんと鳴くんだな。

犬　…なんだっけ…、僕…あれえ…誰かのあとを追っかけてただけ…誰だっけ…

野間　なんだなんだ？　なにを唸ってたんだ？　ん？

犬　ねえ、僕急いでたでしょ？　なんだっけ？　誰かを追っかけてただけ？

野間　うん…よし。

高村登場。

野間　お、櫻ちゃん。

高村　…あのねえ。犬にチラシ配ってどうすんの？　「ピー」代だって馬鹿にならないんだからね。

野間　いや、まあ…うーん…

高村　まったくもう！　ホント野間くん人間相手駄目なんだから。そんなんだからすぐバイト首になっちゃうんだよ。わかってる？

野間　あの…いた？　操さん。

高村　いない。野間くんがすっぱかしたから、帰っちゃったんじゃないの？

野間　…えーと。

高村　なに？

野間　…うん…

高村　…立て直してるのね。

野間　(頷く)…よし。

高村　やれやれ。

野間　櫻ちゃん、場所変えない？　ここ、なんかあんまり人通らないし。

高村　ホント、人少ないよね。なんかあったのかも。

野間　なんかって？

高村　狐門のところに車停まっててさ、なんか警察みたいな感じの人が乗ってて…あれ覆面パトカーっていうのかなあ…

犬　警察！

高村　わあ。

犬　そうだった！　警察の人が来たんだ。イヤなヤツと、もうひとり…そうだ、それで…

高村　なになに？

野間　なんかいる？　(犬の視線の先を見たりしている)

犬　僕、行かなくちゃ…これ、ありがとう。

犬、チラシを置いて、走って退場

高村 行っちゃった。

野間 犬、退場。

高村 あーあ、チラシ、涎よだれでベトベトしてるっ。

野間 とにかくさ、場所変えてみようよ。

高村 そうね…。そうしようか。

野間、高村退場。

ヌツ、と出る三人の人影。

楠木修、湯浅二郎、黒沼靖の三人。

湯浅 行ったか？

楠木 行きました。

湯浅 誰もいないな？

楠木 いません。

黒沼 なんだったんだ、あいつらは。

楠木 さあ。

湯浅 そのチラシは？

楠木、チラシを拾って読む。

楠木 「狐の森とメゾン六乗を守ろうっ！…私たちは高速道路工事再開による、立ち退きに反対します…」

湯浅 メゾン六乗？ あんなもん守ってどうすんだ。

楠木 なんすか、それ。

湯浅 知らんのか。

楠木 はあ。

黒沼 大学の裏にあるアパートだよ。

楠木 ウラって、ウラは森じゃないすか。

黒沼 いい質問だ。その狐の森のはずれに、木造モルタル二階建ての古いアパートが、時の流れに取り残された孤島のようにポツンと建っている。

楠木 はあー。日当たり悪そうですね…。

黒沼 なんだとお。

楠木 いや、日当たりが…その…

黒沼 悪いよ、そりゃ。

湯浅 …。

湯浅 悪いのは日当たりだけじゃない。

楠木 はあ。え？ なにが。

黒沼 縁起。

湯浅 そう縁起。

楠木 縁起って？

黒沼 もう二十年も前の話だ。あの森で、ひとつの事件があった…。

楠木 事件…。

湯浅 そう、当時日本中を騒がせた、幼女誘拐殺人事件…。

音楽。明かりの変化。
再現フィルム風劇中劇が始まる。

薄田敦子（娘役）、東海林香（母親役）、塩月由紀夫（父親役）登場。

父親 春奈、待ちなさい春奈。

娘 早く早くう。

母親 ホラホラ、ちゃんと足元見て。転ぶわよ！

娘 だいじょうぶだよ。

黒沼 出演協力はわが六乗大学演劇研究会から薄田敦子と三木昌子。そして事件研
と犯罪事件研究会から東海林香と塩月由紀夫だ。

湯浅 うらかな春の一日。その家族は揃って久しぶりの行楽こうらくにでかけた。

黒沼 コウラクってなんすか？ あ痛。

湯浅 （殴って）アホウ。休みの日に遊園地とかハイキングとかに出かけることだよ！

黒沼 それでも大学生がおまえ。

黒沼 すいません。

黒沼 職場結婚の若い夫婦と長男十二歳の兄、その妹八歳の長女。この四人家族だった。

黒沼 …あれ、でも四人って、三人しか…

湯浅／兄 （いきなり）ハルナー！ 早くこいよー！

黒沼 …。

黒沼 人が足んかったんだよ。

娘 お兄ちゃん。はるなボート乗りたーい！

兄 よーし。おいで！ 兄ちゃんが漕いでやるから。

娘 うん！ いこういこう！

黒沼 なんてあの八歳の妹はマニキュアしてるんですかね。あ痛。

黒沼 落とすヒマがなかったんだ。細かいこと言つな。

母 俊平！ どこいくの！ 待ちなさい。

兄 ボートに乗ってくるよ！

母 あなた…。

父 だいじょうぶさ。ここの池は子供でも膝が出るくらい浅いから。

母 気をつけるのよ！

兄 うん！

父 俊平！ 妹の面倒をちゃんと見るんだぞ！

兄 わかつてる！

兄、妹退場。

父 いい天気だ。

母 いい天気ねえ。…やっと落ち着いたわねえ。

父 ああ。ずっと忙しかったからなあ。お母さんもたいへんだったろ。

母 ええ、まあ、たいへんだった、ていうかまだたいへんていうか。卒論がねえ…

父 卒論？ え、だってまだ三年じゃない。

母 あなたにも知らないのね。遠山先生って四年になったらすぐ卒論のブリーフ
出させるのよ。

父 え。それマジ？ お母さん。

母 マジよ、お父さん。あなたも遠山ゼミに決まったんでしょ？

父 いやあ…ちよつとそれは…父さん考え直しちゃおうかな…

黒沼 なんか現実的な話してますね。

黒沼 そこ！ 素に戻らない！

父 いやあそれにしても…

父・母 いい天気(父)だねえ…

兄、再登場。

兄 お父さん…。お母さん…。

母 あら。

父 どうした。

兄 ……。

父 (兄の様子を見てなにかあったことを悟る) どうしたんだ！

母 春奈は？ 春奈はどうしたの？

兄 …。おじさんが…。赤い帽子をかぶったおじさんが…。

父母 …。

刑事1 (薄田) 刑事2 (三木) 登場。

刑事1 じゃ身代金の要求もなにもないんだな？

刑事2 はい。

黒沼 あ、二役。

黒沼 人が足んねえんだよ。

刑事1 誘拐じゃない可能性は？

刑事2 長男が目撃しています。

刑事1 赤い帽子か…。

刑事2 はい。

刑事1 とにかく探せ。前科者のリストと付近の聞き込みをしらみつぶしにやるんだ。

刑事2 はい。

黒沼 そして徹底的な搜索の結果、見つかったのは…。

父母と兄のところに刑事たちが現れる。

父 … 刑事さん。

母 嘘ですよ。嘘って言ってください。

刑事1 たいへん… 残念です。

泣き崩れる母親。

それを支える父親。

表情を失ってただ立っている兄。

刑事1 必ず逮捕します。…必ず。

刑事たち、退場。

黒沼 そしてその通りになった。警察の執念の捜査が実り、赤い帽子の男は逮捕された。

刑事たち、再登場し、鑑木を連行する。

鑑木 あら、あれ、ちょっと…

黒沼 …人が足りねえんだよ。

湯浅 理由なき殺人だった。犯人は五年越しの裁判の末、死刑の宣告を受けた。しかももちろん失われた生命は帰ってはこない。

黒沼 鑑木！ 聞いてんのか！

鑑木、帰ってくる。

役者たちも集まってくる。

黒沼 みんなおまえのために芝居してんだぞ！

鑑木 すいません。

湯浅 犯人が最後に逮捕された場所。アパート六乗館。今のメゾン六乗。妹の死体が発見されたのが、その裏手の、通称狐の森のなか…ってことだ。

鑑木 はあ…。怖いっすねえ…。

湯浅 なんだそのすつとぼけた反応は…。

鑑木 ぜんぜん知らなかつたっすよ。

黒沼 二十年前だぞ。世間なんてそんなもんだよ。

東海林 ちよっと、もういいの？

黒沼 おう、サンキューな。

東海林 忙しいんだから、もう。だいたいあたしらなんてメインの出番がまだなのに、なんでこんな小芝居に…

三木 まあまあ、香さん。ウチの大学の主^ゆふたりの頼みには逆らえないでしょ。

鑑木 主なんですか。

湯浅 まあ、長くいるっただけだが。

三木 来年で八年目でしたっけ？

黒沼・湯浅 そう。

東海林 全部劇研にやらせときゃいいでしょ、こんなの。

薄田 こっちも今たいへんなの。そうだ香。ちよっと相談乗ってくんない？

東海林 なによ。

薄田 ちよっと大きな声じゃいえないんだけど…誘拐事件のこと。

東海林 なんなのよアンタまで…。もう勘弁してよ。

薄田 あ、ちよっと香、待ってよ！

東海林 忙しいの！

東海林退場。

追って薄田退場。

塩月 やっぱり考え直そうかな…遠山ゼミ…

塩月プツプツ言いながら追って退場。

三木 それじゃ、どうも。失礼しました。

鑑木 あ、どうもです。

三木退場。

見送る鑑木。

黒沼 おまえはなにしてんの。
黒沼 いやあ…あれって、劇研の三木さんですよ。
黒沼 それが？
黒沼 けっこう噂なんですよ、一年の間で。ポイント高いっていうか。
黒沼 へえ。あれが？
湯浅 小娘じゃん。
黒沼 駄目。ぜんぜん駄目。
黒沼 さすが留年四年目の人は言うことが違いますね。あ痛。
湯浅 余計なこと言うな。そんなことよりこれでわかったな。
黒沼 なんてしたっけ。
湯浅 なんてしたっけっておまえ…。話を見失ったな。これだよ。
チラシを出す。
黒沼 あ、そうか。
湯浅 これ見るとさっきの連中どうやらメゾン六乗に住んでるみたいだな。
黒沼 立ち退き反対って書いてありますね。
黒沼 森のすぐそばまで高速道路が来てるだろ。あれ再開するらしいな。
湯浅 そうなったら軌道に当たってる狐の森も消滅だ。問題は…
黒沼 はい。
黒沼 そう。工事再開になれば基礎工事で地下を掘るだろう。
湯浅 はいはいじゃない。おまえ、俺たちがこんなカツクしてこれからどこへ行くとおもってるの？
黒沼 え、だって、狐の森に行くわけじゃないでしょ？
黒沼 違うよ。
黒沼 旧二号館ですよ。
湯浅 シーッ！ 誰かに聞かれたらどつする。
黒沼 すいません。
黒沼 なんのために旧二号館に行くか。ちゃんと説明したろ？
湯浅 えーと、中を調べて……地下を探す…
湯浅 そう。いいか、これはわれわれアウトドア研究会が代々伝えてきた極秘情報なんだぞ。…その地下空間はこの大学の敷地のみならず、狐の森を含んだ楓野丘陵地帯全体に広がっている…。
黒沼 …。
湯浅 その巨大な地下壕への秘密の入り口のひとつが、この大学構内の、今では誰も寄り付かなくなつた旧二号館あたりにあるという。
黒沼 そんなにでかいんですか？ じゃあ森の下にも…
湯浅 そう、狐の森のあたりにも入り口があるかもしれない。あそこが伐採されて工事が始まれば、巨大地下壕の存在が明るみに出ないとも限らない。
湯浅 そこでわれわれが第一発見者の栄誉を手にするべく、禁を破ってこうして探索に乗り出そうというわけだ。わかったか若いの。
黒沼 なんかせんぜんアウトドアじゃないっすよね、それって。

湯浅 …。(睨み付けている)

鍋木 わかりました。

黒沼 わかったら行くぞ。

黒沼、湯浅歩き出す。

鍋木 あの…

黒沼 なに。

鍋木 ひとつだけ質問が。

黒沼 なに。

鍋木 先輩たちはあの、来年は、就職活動はしないんですか。

黒沼・鍋木 …。

鍋木 …あの…。

黒沼・鍋木 …。

鍋木 いや、…質問取り消し。はい。行きましょう！ はい。

三人退場。

ACT-3 犬と刑事^{デカ}

大学構内。
成嶋登場。
人を待っている雰囲気である。

そこへ藤村操登場。
チラシを持っている。

距離とって立つ（座るも可）。

成嶋
…。
藤村
…。

藤村は成嶋をチラチラ見ている。
成嶋も気にしている。

藤村、近寄ってくる。

藤村
…。（黙ってチラシを差し出す）
成嶋
…。（受け取る）
藤村
読んで。ヒマだったら。
成嶋
…。（チラシに目を落とす）

藤村は、再び距離を置いて立つ。
のんびりと鼻歌など歌っている。

成嶋
…へえ、高速が通るんだ。

藤村
…。おかげで俺たち出ていかされちゃうってワケ。

成嶋
…。

藤村
…。そこ、書いてあんでしょ。メゾン六乗。

成嶋
…。住んでるんだ。（問いかけ）

藤村
…。住んでるんだ。（お答え）

成嶋
…。たいへんだね。（社交辞令）

藤村
…。たいへんだね。（他人事）

成嶋
…。まあ、俺なんかけっこうどっちでもいいんだけど。他の住んでるやつがけっこうさ、燃えちゃってるんだよね。まあ、退屈しのぎにはいいかなって思ってるね。
あなた…この署名の…野間さん？

成嶋
…。違う違う。俺はその下。

成嶋
…。藤村、操。

藤村
…。そ。そうやって並べて書いてあると、野間のおんちゃんだけ男みたいだろ？ 櫻に慎太郎に操だもん。…あんたは？

成嶋
…。ああ成嶋と言います。

藤村
…。あんた…この学生じゃないよね？ いくつ？

成嶋
…。三十二ですけど。

藤村
…。（笑つ）…ウサギ年だね。

成嶋 ……(頷く)

藤村 ……なんてパツとわかんと思っ？

成嶋 ……。

藤村 ……俺、ハタチ。ちょうど一回り下。

成嶋 ……。

藤村 ……だから敬語いらないって。

成嶋 ……この学生？

藤村 ……違う違う。俺はただウラのボロアパートに住みついでるってだけ。

成嶋 ……仕事はなにやってるの？

藤村 ……まあ…人にはちよつと言えないようなこと。

成嶋 ……。(話題を変える)これ、盛り上がったっての？

藤村 ……どうかねえ…。今の若い子はこういうの面倒臭いんじゃないの？ 学生さんなら支援してくれるだろうってんで、こつやってこんなの作って配ってみちやいるけど…。やっぱホラ、世代のカラーってあるじゃん？ 一回り違うとね。

成嶋 ……僕らの頃からもう、そつだよ。

藤村 ……ふーん…。とにかく、反応はクールだねえ。あの位置にあるアパートだったら

さ、今はともかく昔は大学の寮みたいな雰囲気だったんじゃない？ そついう

さ、なんていうの、故郷感覚があんのかなーって思ったんだけどさ。

成嶋 ……いや…違うだろうね。

藤村 ……そつかね、やっぱ。

成嶋 ……君らはもう知らないだろうね…。

藤村 ……なにが？

成嶋 ……君がちよつど生まれた年の事件だから…。

藤村 ……あそこで？ どんな？

成嶋 ……そこへ、犬が、駆け込んで登場する。

犬 ……見つけた。

成嶋 ……犬は息を切らせて、二人の人間を見つめている。

成嶋 ……ああ…さっきの…

藤村 ……関心なさそうに犬を見ていた藤村がはっとして立ち上がる。

藤村 ……んじゃあ、まあ、ご支援よろしくってこと。…じゃ。

成嶋 ……藤村、犬の視線を避け逃げるように退場

成嶋 ……それをじつと見送る犬。

犬 ……あの人だれ？

成嶋 ……知ってるの？

犬 ……知らない…知ってるのかな？ 知ってるかも…わかんないや…

成嶋 ……いいよ、悩まなくても。どうした？ 深浦くんを追いかけたの？

犬 ……。

成嶋 ……だいじょうぶだよ。彼犯人じゃないから。それはわかってるんだ。

犬 ……。

成嶋 ……。

犬 ……。

成嶋 ……。

成嶋 ただね、ある人が誘拐されて、その日ちょうど彼がその人に会ってるんだよ。だからどうしても話を聞かなきゃならないんだ。それだけだよ。

犬 誰が誘拐されたの？

成嶋 ……君になら言ってもいいかな。誘拐されたのは瀬川重人の息子なんだ。

犬 瀬川って誰？

成嶋 瀬川って言っても君にはわからないか。瀬川重人は現職の日本の法務大臣なんだ。誘拐されたのは法務大臣の息子なんだよね。

犬 ……

成嶋 笑っちゃうよね。まあそれでやっかいなことになっちゃってね。

犬 ……

成嶋 世間はまだぜんぜん知らないけど、警察は大騒ぎしてるよ。さっきの森戸さんなんか本庁のエリートでさ。僕とそう年も違わない。でもあの通りさ。県警の平刑事なんて鼻もひっかけてもらえない。

犬 あいつ嫌いだ。

成嶋 好きなタイプじゃないけど…でも別に…ああいうの慣れてるんだ。

犬 ……

成嶋 昔っからそうだよ。なんか、人とうまくやれなくてさ。警察官になったときも、ずっと内勤で…鑑識課だったんだ、最初。証拠品から指紋を検出したり…いろんな薬品を使って犯人の血液型とか性別とかをね…森戸さんの言う、オタク野郎ってわけ。でも僕にはそれが一番似合ってたんだ。…つまんないかな、こんな話？

犬 つまんないよ。もっと話して。

成嶋 ……なんか…不思議な犬だな、君は。俺の言うことわかってるみたいだよ。

犬 君こそ、人間なのに僕の言うことがわかっているみたいだ。

成嶋 (笑って) タイミングなんだな。きつと。君が吠えたり唸ったりするタイミングが、まるで、こっちの言うことを理解しているみたいな感じだから…。つい会話が成り立っているような錯覚に陥っちゃうんだな。

犬 それが錯覚って思うなら、人間同士の会話だって錯覚じゃないのかな？

成嶋 (笑って) ホラ、まただ。面白いな、君。

犬 君がそうやって明るく笑ってるのが、なんかうれしい。

成嶋 なんて言うんだらうね。本当の名前は。やっぱりジョンかな？

犬 わからない。たぶん違うと思う。

成嶋 飼われてたんだらう？ どこかで。

犬 ……

成嶋 悪いこと聞いちゃったかな？

犬 いや…いいんだけど……なにか忘れてるんだ…僕。

ふたり(ひとりと一匹)、やや沈黙。

成嶋 ……よかったら僕が名前付けてもいいかな。

犬 えっ。

成嶋 駄目かい。

犬 ……うん。いいよ。いいよ！ ホントだね？

成嶋 時間かけていい名前を考えるからさ。
 犬 わかった。約束だよ！
 成嶋 ああ、約束するよ。

成嶋、立ち上がる。

成嶋 さてと、どうやら待ち合わせはすっぱかされたみたいだ。まあ、相手は忙しい人だからしょうがない。…帰るよ。

犬 帰るの？

成嶋 じゃあ、また。

犬 ねえ、ねえ！

成嶋 …。

犬 ……いつしよに行つちやダメかな？

成嶋 …。

犬 ……いつしよに行きたいんだ。

成嶋 …。

そこへ、元鑑識課の近衛和夫登場。

近衛 成嶋くん。

成嶋 近衛さん。(頭を下げる)

近衛 やっぱり思ったように時間がとれなかった。すまん。

成嶋 とんでもない。わかってますから。

近衛 久しぶりじゃないか。

成嶋 ご無沙汰して…。部長もお元気そうで。あ…いや…

近衛 部長はよしてくれ。とつくにやめたんだ。君、捜査課にまわったそうだな。出世したじゃないか。

犬 この人は誰？

成瀬 近衛さんこそ、あちこちの研究所でひっぱりだこだそうですね。

犬 ねえ、この人だれ？

近衛 貧乏ヒマなしさ。おう、なかなか利口そうな犬だな。

犬 こわいよ…

近衛 どれ。飼犬かな？ 野良じゃなさそうだが…

犬 こわいよ！ ねえ！ 助けて！

近衛 おう、どうした？ そう吠えるな。ん？

成嶋 ……どうした？

近衛 なにもせんよ。ホラ。

犬 近寄るなッ！

犬、一目散に駆け出す。退場。

近衛 やれやれ、嫌われたか。

成嶋 いやあ、そんなことないでしょう。

近衛 もう見えなくなっちゃった。

成嶋 ちよつと変わった犬なんです…

近衛 そうだ、成嶋くん。すまんが今日はこれ以上つきあえんのだ。すぐ戻ると言うて出てきたんだよ。

成嶋 かまいません。ちょっとお話させていただきたかったですから。

近衛 仕事上の悩みか？ 難しい事件なのか？

成嶋 いや…ただの愚痴ですから。ホントに。

近衛 すまんな。

成嶋 失礼します。

近衛 また連絡をくれ。元気でやれよ。

成嶋、一礼して退場。

ひとり残る近衛。

そこへ笹川一志、渋谷仁、樋口倫子、雑談を交わしながら登場。

樋口 あ、ホラ、いらつしやったわ。

笹川 ああ近衛さん。こちらでしたか。

近衛 寄ってくる三人。

近衛 …。

笹川 御用のほうは、もういいんですか？

近衛 …。

渋谷 実験室のほう、閉めてきました。

笹川 戻りますか。

樋口 なにか食べて帰りましょうよ。お腹空いて空いて…

笹川 そうだねえ、朝からずっとだったからねえ。なにか食べますか、近衛さん。

近衛 …。

渋谷 研究所に戻ったら、アレ、ありますけど。

笹川 アレってなに？

樋口 アレえ？ アレはよそうアレは。

笹川 アレってなに？

樋口 アレはいかんでしょう。

渋谷 樋口さん、アレ嫌いですが。

樋口 嫌いっていうか…アレはほら、甘いし。

笹川 甘いんだ。

渋谷 まあ、煮詰まってるしね。

樋口 煮詰まってるわよね。

笹川 煮詰まってるんだ。

樋口 で、酸味が強いでしょ。

笹川 酸味？ 甘辛くて酸味？

渋谷 サラサラであんまり歯ごたえがないしね。

樋口 ああ。

笹川 煮詰まってるんじゃないの？

樋口 渋谷くんそういうのダメよね。

渋谷 笹川さんのロッカーにまだいっぱい入ってるんだけどなあ。

笹川 えッ、お、俺のロッカーに、なにが？

渋谷 まあ、やめときましょつか、アレは。

樋口 やめよう。やめ。

笹川 やめんなよ。え？ なんだよ？ 俺をからかって遊んでるわけ？ それって。

近衛さん、なんとか言ってくさいよ。

近衛 笹川くん。

笹川 はい。

近衛 たぶん間違いないと思うが…。

笹川 はい。

近衛 アレがいた。

樋口 え？

笹川 近衛さんまで…。アレってなんですか、アレって。

近衛 アレはアレだよ。

笹川 食べられるんですか、ホントに。

近衛 なにを言っとるんだ君は。

笹川 だって甘酸っぱくて煮詰まってるサラサラ…

近衛 それは渋谷くんたちが遊びで作った老人用の栄養食だろ。

笹川 そんなコトしてたの？

近衛 ええい、緊張感のないやつらだな。私がアレと言ったらアレだよ。

笹川 …え…まさか…

近衛 犬だ。犬がいた。

三人に緊張が走る。

樋口 まさか…。

近衛 たぶん、間違いない。アレだ。だいぶ姿は変わっていたが…。

渋谷 姿が変わっていた？

近衛 成犬になっとな。

樋口 …成長した？ そんな…

笹川 そんな馬鹿な！

近衛 言い切れるか？

笹川 いや、しかし…。

渋谷 ありえませんが。成長はできない。

近衛 言い切れるのか？

渋谷 …。

近衛 もともと、処分したはずのアレが生き延びて、そればかりか研究所の外へ出て

しまったということ自体、ありえないことじゃなかったのか？

渋谷 …。

近衛 一度起こったありえないことは、二度起こることはありえないってわけか？ そ

れが君たちの科学的精神だとしても言っのか？

一同、声がない。

近衛
とにかく探すんだ。白黒のブチ。真っ黒で大きな目だ。確かめなければ……。なんとしてでも回収するんだ。もし私の見たのが……。あの犬が本当にわれわれの知っているあの犬の成長した姿なら……。われわれがしたことは……

近衛、一同を見回す。

近衛
人類の歴史を変えることになるぞ。

四人、近衛の合図で散る。退場。

ACT-4 マイフロコスト社

大学構内

研究室。

助教授遠山卓登場

追ってマイフロコスト社員福本良太、同松岡庸介登場。

福本 先生。遠山先生。

立ち止まり振り返る遠山

遠山 はい？

福本 ああ、追いついた。先生、足が速いですな。

松岡 いやあ、先生、足長いですわ。

福本 あ、そうか、そういうふうに言わないとね。

松岡 そういうふうになって…そういうふうに言ったらまるでお世辞言ってるみたいじゃないですか。

福本 いやいやけっしてそういうふうな意味じゃなく…

遠山 なんの御用ですか？

松岡 お忙しいところたいへん失礼いたします。私こういっもので…

福本 私も。

ふたり名刺を差し出す。

遠山 マイフロコスト。福本さんに…

福本 はい。

遠山 松岡さん。

松岡 はい。

遠山 マイフロコストって、あのマイフロコストですか？ ウェンディーズ2000とか作ってる？

福本 ああ、なにやらそんなヤクザなシロモノも作っておるようで。

松岡 ずうたいだけは大きな会社ですんで、どこでなにをやっているのやら。

福本 先生、ちなみにコンピュータはなにをお使いで？

遠山 僕は仕事にコンピュータは使いませんね。
松岡 さすが！ 先生わかってらっしゃる。若くして助教授になられただけのことはある。正解です。最先端です。

福本 コンピューターを使わない驚訝。合理性を求めない豊かき。トレンドを追い求めない感受性。これが次のトレンドです。

遠山 システムの営業じゃないんですね？ とすると…？ ええとあなたが松岡さんでしたね。

松岡 覚えていただけましたか。いやあ、恐縮です。忘れてください。社名だけでじゅうぶんです。

福本 そう、私ら会社と一心同体。もう、名前も社名とおなじにしてみましたもいいくらいに思ってますから。

松岡 マイフロです。

福本 コストでございます。

松岡 ふたりあわせて

松岡・福本 マイフロコス：

福本 あ、先生。そんな一歩引いて観察するような目で見ないください。

遠山 観察してはいません。要件を予想しようとしていたんです。

松岡 さすが遠山先生。してその予想の結果は？

遠山 青田刈り。

福本 正解です。そのものズバリ！ 身も蓋もないくらいの確なお言葉です。

遠山 まず第一に僕にはそれほど力はありませんよ。ゼミも小規模だしね。第二に、どんな人材が欲しいんです？ そちらのご要望は？

松岡 第一に、ご謙遜でしょう、遠山卓と言えば今をときめく若手研究者の五本の指のうちのズバリ親指じゃありませんか。

福本 第二に、欲しい人材は…とにかく優秀な人間です。分野は問わない。マイフロコスは優秀な人間に消費を惜しみません。年功序列の枠組みでは力を解放できない若い能力を他のどこよりも評価します。

遠山 そして能力がないと評価した人間は切り捨てる？

松岡 それは厳しい現実ですが、そうです。そうでなければ発展していくことは難しい。能力によるセレクションは現実世界の基本原理でしょう。

福本 能力と収入がキチンと正比例する、そういう理想を追求しているわけです。真にやりがいのあるシステムを作ることを目指しているわけです。

遠山 正論ですね。でも僕は日本の終身雇用を実はとても評価しているんですよ。

福山 …え。

遠山 いったとき、日本の経営とか言って持ち上げられていい気になってしまったけれど、終身雇用というのは、基本的には人間の欲望に歯止めをかけるシステムですから。

松岡 欲望に歯止め？

遠山 ええ、能力と収入が直線的に比例しないシステムは、基本的にはそうですね。能力を発揮することそのものに精神的な満足感を覚える、物理的利益を副次的なものともなせる人間を育てる、非常にモラリステックなシステムですよ。はあ…なるほど…

松岡 しかしそのために能力のあるたくさんの人たちが我慢してきたわけで…

遠山 そうなんです。そこなんです。人間に我慢を覚えさせるシステム。これが究極の社会システムなんですよ。日本は非常に近いところまで行っていた。惜しかったんですけどね。

松岡と福山、言葉を失っている。
そこへ米倉清美登場。

米倉 そのへんまでにしといてあげて。

福山 米倉さん。

松岡 ダメです。この先生にはお手上げです。

米倉 そうだと思ったんだけど。まあ、これも勉強と思いなさい。

米倉、歩み寄ってくる。

松岡 参りました。あんなふうに言われるとは思わなかった。

福山 いろんな考え方があるもんですねえ…。

遠山 君たちは頭がいいから。頭のいい人ほど、理屈に足をすくわれるんだよね。

松岡 いやあ、勉強になりました。

米倉 あれ、本音でしょ？ この人が学生のころから言ってたことなのよ。前もって教えてあげるところとも思ったんだけど。

福山 いや、たぶん理屈では勝てないです。

米倉 久しぶりね。

遠山 久しぶりだね。

米倉 助教授になったって聞いて、お祝いを言わなきゃって思ってたの。

遠山 そりゃどうも。

松岡 あの、米倉部長。

米倉 ああ、ここはいいわよ。あとはあたしひとりでじゅっぶん。ね？

遠山 さあ。

福山 それじゃお先に失礼します。

松岡 失礼します。

米倉 ご苦労様。

福山、松岡退場。

遠山 ていよく実験台に使ったってわけか。

米倉 人材が欲しいのはホントなのよ。

遠山 まあそんなところだと思っただよ。君が後ろにいるなって。

米倉 思い出してくれたんだ？

遠山 あんまりロマンチックなシチュエーションじゃないけどね。

米倉 昇進おめでとう。

遠山 …相変わらずだな、君は。

米倉 そう？

遠山 僕の昇進は五年前だ。

米倉 そんなになるか…。じゃあ、やっと言えたわ。

遠山 食事にでも？

米倉 仕事は？

遠山 もう終わりだ。いいタイミングで…

米倉 いいタイミングだったわね。

遠山 いいタイミングを計って来たんだね。

米倉 そういうこと。

遠山、米倉退場。

塩月、東海林登場

東海林 うーむ。

塩月 なんです。

東海林 なんですって、あんた見てたでしように。

塩月 マイフロコストなんて大企業に就職できちゃうんですかね。

東海林 …。

塩月 やっぱ遠山ゼミに賭けてみるかなあ…。

東海林 あんたもう決めちゃったんでしょ。ゼミ選択なんてよっぽどの理由がないと変更きかないのよ。いまさらなに言ってるんのよ。

塩月 まあねえ…。

東海林 そうじゃなくて今の女。

塩月 ああ、部長って言ってたよね。人事部の部長かなあ。それってすごい太いパイプがあるってことですよねえ。

東海林 もういいわ。あんた就職のことしか頭にないの？

塩月 いやあそついうわけじゃないけど…。

東海林 だったらもう就職しちやいなさい。今しなさい。

塩月 いやだつて僕まだ二年生ですよ。

東海林 だからあたしもそれを言ってるわけ。

塩月 ああ、なるほど。

東海林 あの女さ…元女房かな？

塩月 はあ？

東海林 あんた知らないの？ 遠山先生^{バツ}×一なのよ。

塩月 そうなんだ。

東海林 今の雰囲気はさ、どう考えても×一の^{バツ}×そのものか、×ついた原因のほつが、いずれどつちかだと思わない？ ねえつ。

塩月 東海林さんなんか目がキラキラしてない？

東海林 ぜつたい、どう考えてもそつよ。でしょ？

塩月 なにをどう考えればいいのかわかんない。

東海林 くー。なんかこつ、みなぎつてくるものがあるわよね。

塩月 はあつ？

東海林 とにかく、いくわよ。

塩月 どこへ？

東海林 なにすつとぼけてんの。見失つちゃうじゃないの。ホラ行くよ。

塩月 見失つて、いや、ちよつと…

東海林 早く。

東海林、塩月退場

大学構内。

高村、野間、藤村登場。

三人でチラシを配っている。

人が通るたびにチラシを差し出しているが、誰もとってくれないようだ。

高村 よろしくおねがいします。

藤村 しゃーす。

野間 …。

高村 よろしくおねがいします。
藤村 しゃーす。
野間 …。

しばらく人通りが絶える。

高村 野間くんさあ…。なんか言いなよ、黙ってないで。
藤村 そうだよ、おまえは。

野間 …うーん。

高村 黙って出されてもなんだかわかんないよ。

藤村 そうだぞ。

高村 操さん人のこと言えないでしょう！

藤村 そう？

高村 なんなの、「しゃーす」って。

藤村 なにつて…なんていうか、フレンドリーなフィーリングで…

高村 ゼンゼンやる気なさそうにしか見えない。

藤村 やる気…

三人そろってあたりを見回す。
人っ子ひとりいない。

藤村 …やる気も垂木もあるかあ！

高村 ほんつと人通んないわよね…

藤村 なんなんだよこのクソ大学は！ ったく馬鹿馬鹿しい！

野間 大学、休みなんですかね？

高村 そんなことないと思うけど…

藤村 おまえだおまえ！ おまえがなあ、そうやって暗そうな顔つきで突っ立ってっから人が寄ってこないんだよ！

野間 人のせいにしてないでくださいよ。

藤村 暗いんだ、辛気臭いんだよ、全身。オラ、ちょっと笑ってみな。

野間 …（笑顔）

藤村 ニセモノっぽいんだよ笑顔が！！ なんか近寄ったらやばい雰囲気かじみ出まくってんだよ！ 決まり！ おまえのせい！

野間 ちがいますつて、ハハハ。（相変わらずニセっぽい笑い）

藤村 だからそのおたく笑いをやめろ！

高村 ああッ、ダメ！

野間 …。

藤村 なんだよ。

高村 まずいよ、そのキーワード。

藤村 なに、キーワードって…おわ。

あたりがズーンと暗くなり、突然野間にスポットが。

野間 ……おたく？ 僕のこと？…ハハハ…。とんでもない。違いますよ。見えますか？
 そう見えるんですか？ 僕が？ イエイ工違いますって。ただ僕は趣味が人より
 広いだけです。そりゃあ昔はアイドルの追っかけもやりました。カメラ小僧
 を卒業したあと、コミケ、コスプレときて、ロリコン、プロレス、一通りこな
 しましたよ。凝り性なところがあるから、中途半端にやめられない。今でも趣
 味の一環として楽しみながら続けているんです。それだけです。

藤村 立派なおたくじゃねえか。

高村 ダメだったら！

ズーン。

野間 ……たしかに僕はおたくさ。そのどっこが悪い？…あんたがたはそつやって、
 自分たちが幸せになるために他人を貶めて平気でいる。自分たちの安定のため
 に、自分と違った人間にレッテルを貼りつけて差別する。笑わせるなッ！ あ
 んたたちが嫌っているものは、あんたたちのなかにちゃんと存在してるじゃな
 いか！ 俺たちは…俺たちはおまえたちの穢れを引き受けているんだ！ そう
 さ、俺たちはおまえらの影のさ！ どんなに嫌っても、逃げておまえら
 の背中にびったりついていくのさ！ ハハ！ ハハハハハ！

野間のまわりは、いつのまにか、人だかりになっている。

遠藤、鼓、堤、三木、薄田。

野間 ……だがおまえらよりもつと許せないのは、いまどきの明るいおたく連中だ！ お
 たくであることを隠そうともせず、むしろそれをウリにして大手を振って世の
 中にコミットしていくあの連中！ あいつらみんなニセモノじゃねえか！ お
 たくは神聖なんだ！ 穢れを引き受けるがゆえに神聖な存在なんだ！ 聖と俗
 の境界線に両足をかけ、甘んじて非難と嘲笑を浴びながら、すつくと立つ一
 本の針葉樹、それがおたくだ！ それを……どいつもこいつもホイホイホイ
 イ世間に順応しやがって……ああっ憎い！ おたくはおたくが憎い！ 憎んでや
 るっ！

崩れ落ちる野間。

遠藤 なんなの？

三木 さあ…。

鼓 急に空が暗くなったからドラゴンが出るのかと思って…

遠藤 そんなバカな。

堤 なんか、すすり泣いてますけど。

薄田 なかなかいい芝居するな…。スカウトするか？

三木 ウチの大学生ですかね？

堤 芝居じゃないんじゃないですかね？

高村・藤村 ……（顔を見合わせている）

チャンスとばかりに、

藤村 えーお集まりのみなさん！ ご覧いただけましたでしょうか。

高村 感じていただけましたでしょうか。悩める青年の熱き叫びを。

藤村 平凡な道のりだったはずなのに、他人と同じに生きてきたはずなのに…

高村 その彼をここまで追い詰めてしまったものはなんなのか。

藤村 それは！

高村 それは？

藤村 それは…えー、詳しくはこのチラシに…

全員にチラシを配り始める。

三木 なに？

遠藤 あー、これ…

堤 なんですか？ メゾン六乗って？

鼓 そういうマンガが昔あったね。

遠藤 それはめぞん一刻でしょ。

野間が立ち上がる。

野間 めぞん一刻。僕とめぞん一刻との出会いはある晴れた冬の日のコンビニの片隅…

堤 あ、また始まったよ。

藤村と高村、慌てて野間の口を塞ぎ手足を拘束して黙らせる。

高村 メゾン六乗はこの大学のすぐウラにあるアパートです。

薄田 ああ、そういえば…

堤 裏って、森じゃないですか。だいたいあの森って入れるんですか。

薄田 門があるだろ。裏門出たらすぐだよ。

鼓 裏門？ そんなのあったんだ。

遠藤 旧二号館の裏だよ。誰も使ってないけどね。

鼓 へえー。で、そんなところにアパートが…

三木 狐の森のはずれにあるのよ。一軒だけ。

遠藤 誰も住んでないんじゃないか？ あんなとこ。

薄田 いわくつきだからね。

遠藤 いわくつき？

薄田 いや、まあ、その話のもういいよ。

藤村 あー、ちょっと。ちょっとお嬢ちゃん。

薄田 …はい。

藤村 そのイワクってやつ、ちょっとおつと教えてくれない？

薄田 …。

藤村 ついさつきも小耳にはさんだんだよね、メゾン六乗で昔なんか事件があったっ

ていう話…。

高村 事件？

藤村 そ。コート着た若いオジミみたいな男が言ったのよ。

遠藤 それって…

堤 もしかして…

藤村 あー…ナルシマって言ってたかな。

薄田 さっきの刑事だ。

藤村 刑事？

高村 あ、じゃあやっぱりあの車って覆面パトカー…

藤村 覆面？

高村 うん、なんかねえ、髪の毛の長い男の人が連れていかれてた。

藤村 髪の毛の長い男？

高村 なんかいっつ切り胡散臭うさんそうなヒトだった。

薄田・三木 ……。

遠藤 深浦さんだ…。

藤村 あいつが刑事ねえ…。そうは見えなかったけど…。なんか犬といっしょに黄昏たそがれてたぜ。

三木・薄田・堤・鼓 犬！

藤村 な、なによ。

薄田 白黒ブチの？

三木 目のくりつと大きい？

藤村 頷いている。

薄田 ジョンだ。

三木 (ほぼ同時) ジョアンナだわ。

堤 (ほぼ同時) ジョルジュね。

鼓 (ほぼ同時) ジョバンニが…。

藤村 ……なんなんだよ！ どれだよ！

そこへ、渋谷、笹川登場

渋谷 ああ、ちよつと君たち。すまないんだけど…

一同 ……。

渋谷 ちよつと聞きたいんだけどね。このあたりで…

笹川 犬を見かけなかったかな。白と黒のブチ。くりつとした大きい目で…

一同 ……。

笹川 ……なに、どうしたの。

一同、笹川たちを放っておいて、それぞれ密談モード。

学生グループ。

あるひとり どういうこと？

別のひとり さあ。

別のひとり だいたい刑事がなんでジョンと一緒にいるんだ？

別のひとり さっぱり話が見えませんか。

別のひとり やっぱほら、デカとイヌだから…

別のひとり ジョンじゃないっていうのに。

別のひとり だからなに？

別のひとり いやあ、お似合いだなあと…

別のひとり 全然意味わからん。

別のひとり あの人たち、なんで犬探してるわけ？

別のひとり いい疑問だぞ鼓！

別のひとり 鼓は僕です。

別のひとり そういえば君授業あるんじゃないなかったの。

別のひとり 休講でしたあ。イエーイ。(Vサイン)

別のひとり そんなことより深浦さんどうするんです？

別のひとり どうするってたって…

別のひとり イエーイ、って死語じゃ…。

とかなんとか收拾がついていない。

住人コンビ。

高村 ねえねえイワクってなに？

藤村 だから俺もよくわかんないんだって。

高村 なんかも面白くなってきたわねえ。

藤村 面白くないデス。

高村 あたしそういうのけっこう好きなの。

藤村 ヒマさえあれば推理小説ミステリはつか読んでもんな、アンタは。

高村 なんて操さん不機嫌なの？

藤村 ったく…警察が来てんならもつと早く言えよ。

高村 なんて操さんに言わなきゃなんないの？

藤村 だからあ…俺がなんでわざわざあんなボロアパートにいると思ってるの。

高村 なんてって…

藤村 隠れてんの！ 人目を忍んでんの。

高村 だからそれはどうして？

藤村 それはあ…(ため息)もういいや。

高村 ねえ、警察犬なんじゃないかな！

藤村 なにが？

高村 その犬。だって刑事といっしょにいたんでしょ？

藤村 いや…違うと思う…。

放って置かれている笹川と渋谷は呆然として眺めている。

そこへ、夢から醒めたように清浄な顔つきをした野間が、チラシを差し出す。

野間 ……お願ひします。

笹川・渋谷 ……

笹川、野間に名刺を渡す。

その様子を一同が見ている。

笹川 僕らこついうもんなんだけど…

野間 (名刺を見て、一同に聞かせるように) 財団法人老人医学研究所の笹川一志

さん。

遠藤 老人医学…

堤 研究所。

笹川 あのね、あのね、週に一度ね、あっちのね、工学部の施設を使わせてもらって

るんですけども、その、犬がね…

一同 ……

笹川 (視線を浴びてややあがっている。渋谷に) な。

渋谷 僕、しゃべりましょうか。

笹川 うん。

僕たちの研究所で可愛がってた犬が逃げちゃってねえ、それっきり見つからなかつたんだけど、この大学の構内で見たって人がいて、それで探してるんだ。君たち、知らないかな？

笹川 うん。そう。

野間 その犬なら僕、見かけましたよ。

高村 ああ、野間くんがチラシ渡してた犬か…。

野間 そう。

藤村 犬にチラシ渡すなよ。

野間 うん。

渋谷 白黒のブチ？

野間 はい。

渋谷 黒くて丸い目？

野間 ええ。

渋谷 それだ。

笹川 その犬、どこにいるかわかるかな？ どこで見たの？

野間 僕が見たのは確か…

藤村 ちよっおと待った。

一同、藤村を見る。

藤村 どうもあんたら嘘ついてるみたいだなあ。

笹川 …。

渋谷 嘘？

藤村 ああ。嘘だね。あの犬を可愛がってるって言ったよなあ。

渋谷 …。

藤村 じゃああの犬の名前を言ってみなよ。可愛がってたんなら名前くらいついてん
だろっ？ ええ？

渋谷・笹川 …。

藤村 おらどうした。あの犬の名前言ってみな！

薄田 ジョンよ。

三木 (ほぼ同時) ジョアンナ。

堤 (ほぼ同時) ジョルジュ。

鼓 (ほぼ同時) ジョバンニ。

藤村 いいの！ おまえらは黙って！

一同 …。

藤村 ほら。どうした。言えないなら俺が教えてやるっ。あの犬の名前はな、
01101だッ！
r S |
アールエス

シーン。

一同 はあ？

渋谷・笹川 ……。

渋谷と笹川、目に見えて動揺している。

高村 なんなの、それ。

藤村 さあ、知らん。

高村 そんな無責任な！

藤村 俺は知らないけど、そいつらが知ってるみたいだぜ。

笹川、動揺を隠そうとするあまり、爪を切ったりしている。

藤村 現実逃避すんな！

笹川 ……ん？

遠藤 あ、それ、なんのことですか？

藤村 あの犬のわき腹ンとこにそう書いてあるんだよ。小さく、レーザーで焼いたよ
うな文字でな。

高村 操さん、なんでそんなこと知ってるのよ？

藤村 うるせえな、今はそんなことはいいの！

高村 もう！

藤村 ……ホントのこと言おうよ。研究所の犬。コードネームつきの犬。なんかの実験
に使ってたとか？

笹川 いやあ…その…決して虐待とかそういうことではなく…ええ…純粋に学術的
な…(プチン、と爪を切る)

渋谷 確かにペットとして飼っていたわけじゃない。でも可愛がっていたのはホント
だ。動物たちは研究に貢献してくれる。だから僕らも愛情を持って接している
んだよ。

笹川 そうそう。(パチン)

渋谷 僕らの研究所はそういう点はキッチンとしてるんだ。決して怪しげなところじゃ
ない。

笹川 君たちも知ってるだろ、あのマイフロコストが全額出資して作ったんだ。歴れっきと
した基礎医学研究所なんだよ。(プチン)信用してくれよ。(プチン)あ、深爪…

三木 あの犬…

一同三木を見る。

三木 倒れていたんです。ひどい怪我をして。もの凄い高熱。足は四本とも骨折し
てた…。

一同 ……。

薄田 この子が連れてきたの。あたしらみんな必死で介抱した…。よく助かったよ。

野間 どこに倒れていたんですか？

三木 ……。

薄田 それがこの子、聞いても言わないのよ。そのへんとか言うだけで。

一同が三木を注目している。

三木 ……。

薄田 ホラ、こうなったらアンタ言っちゃいな。どこよ。

三木 ……旧二号館の前。
 藤村 え？ いや、そんなはずは…
 薄田 旧二号館で…あんなんでそんなところに？
 三木 ……ごめんなさい。

三木、たっぷり引きつけておいて、やおら走り去る。(退場)

一同 ……。

藤村 あれ？

遠藤 なんだなんだ？

藤村 なんか涙ぐんでたぞ。

薄田 またアイツは小芝居を…

堤 誰も騙たまされませんよねエ。

鼓 ……。

鼓、三木の去ったほうをじっと見ている。

鼓 三木さん！

鼓、いきなり三木を追って退場。

遠藤 あれ。

薄田 見事に捕まってるヤツ…。

高村 なんか学園ドラマみたいになってきたわね。

野間 42点。

藤村 なにを言ってるんだオマエは。

堤 ……。

堤は鼓の去ったほうをじっと見ている。

堤、いきなり鼓を追って退場。

遠藤 あら。

薄田 ……。

高村 まずは青臭いニオイがたちこめてきたわね。

野間 作者は登場人物キャラクターの整理に着手している。

藤村 だからなんなんだオマエは。

そこへ東海林と塩月登場。

塩月 東海林さん、待ってくださいよお。

東海林 早くしなさいよ。見失っちゃうじゃないよ。

塩月 見失ってもなんの不都合も…おや。

東海林 あんたなにしてるの？

薄田 あたしがなにをしているか。それがあたしの一番知りたいことデス。

東海林 なんかあんたんとこの若いのがつながってマラソンしてたわよ。

薄田 ウチのは先頭ランナーだけ。

東海林 ねえ、そんなことより遠山さん見なかった？

薄田 遠山サンて誰？

東海林 うちの大学で遠山さんってたらひとりしかいないでしょ。

薄田 そんなことはないと思う…。

塩月 先生ですよ。遠山卓助教授。

薄田 見ん。(見ない、というところらしい)

東海林 ちいっ。

高村 えええッ！

藤村 わ。

高村 遠山卓つて、遠山卓！？

藤村 今度はなんだよ！

高村 まさかこの大学に…信じられない…でも…ああ、きつとそうだわ！

藤村 あのお…櫻ちゃん？

高村 (東海林に) 会わせて！ ねえ！ その方に会わせて！

東海林 な、なによ、ちよつと…

藤村 おい、ちよつと落ち着けよ、おい！

東海林につかみかかる高村を必死におさえる藤村。

東海林 なんなのよ、いったい。

薄田 さあ。

野間 解説しましょう。

藤村 手伝えよオマエは！

野間 一部推理小説愛好家のあいだで強烈なカリスマ的人気を誇る麻耶汰俱人という作家がいます。

藤村 はあ？

野間 まあ、操さんは知らないでしょうね。麻耶汰俱人はその幻想的で奇怪な作風に

より日本のラブリフトとも、沼正三の再来とも言われています。

藤村 誰なんだそいつらは…。

遠藤 あ、僕知ってる、名前だけ…。

薄田 あたしも聞いたことある。覆面作家とかなんとか…

東海林 覆面作家ア？

遠藤 正体不明の謎のミステリー作家とかいう…

東海林 正体不明エ？

塩月 だって出版社の編集者とかにはわかってるわけでしょ。

野間 麻耶の作品は最初の段階ではネットワーク上に流されるだけです。それを心あ

るものたちが自費出版の形で流通させているわけです。

高村 麻耶汰俱人の正体は誰も知らないの。唯一わかっていることは、ペンネームが

本名の組替文字アナグラムになっていることだけ。でも…。

野間 そう。最近になって、どうやら麻耶がどこかの私立大学の教員であるらしいこ

とがわかった。

高村 それも助教授クラスなの。

野間 マヤ・タクト。人名と思われるあらゆる組み合わせが考えられ、そのリストの

トップに位置するのが、トヤマ・タク、あるいはトオヤマ・タク。そういうわ

けです。

東海林 それが遠山先生だっというの？ 馬鹿馬鹿しい。

高村 バカバカしいとはなによ！
東海林 なによ！

塩月 まあまあ…。ホントだったら面白いけど、でも遠山さんがコンピューター触つてるとこ見たことないからなあ。

東海林 遠山先生がそんな胡散臭いネット小説なんか書くはずないでしょ。オタクじゃあるまいし。

藤村 あッ。(キーワードの出現に慌てて野間を見る)

野間 (仏のような笑顔で見返す) ん？

藤村 …いや…なんでもない。

東海林 遠山先生はね、仕事でコンピューターは使わない人なの。さっきだってマイフロコストの営業にはつきり言ってたわよ。

薄田・笹川 マイフロコスト？

話に割り込めずにいた笹川と渋谷、ここぞとばかりに、

笹川 今、マイフロコストって言った？

東海林 なに、この人たち。

遠藤 老人医学研究所の人。

東海林 なにそれ。

遠藤 なにつて、それがその…

薄田 四十ページの真中へんから読み返してちょうだい。

渋谷 営業が来てるって？

塩月 来てましたよ。それも部長クラスの人が。米倉っていう女の…

渋谷・笹川 ヨネクラ…！

一同 …。

渋谷・笹川 …！

渋谷、笹川、顔を見合わせ、脱兎のごとく退場。

藤村 なんだありや。

薄田 結局なににきたんだ、あいつら。

遠藤 だから犬を探しにきたんでしよう？

東海林 犬？ 犬つてなによ。

野間 解説しましょう。

藤村 しなくていいっ。

再び混乱状態のそこへ

遠山 (登場) やあ、どうしたの君たち。

東海林 遠山先生！

塩月 どうもです。

遠山 ああ、君は、塩月くんだね。確か来期から僕のゼミに…

塩月 ハイ。あの、どうぞお手柔らかに。

遠山 こちらこそ。

藤村 …あれか？ 覆面ナントカって。

高村 …。

藤村の後ろに隠れてキラキラ光る目で顔だけ覗かせている。

藤村 なにやってんのアンタ。

高村 心臓止まりそう…。

東海林 先生、あの、あのですね、先生はまさかマヤなんとかっていう…

遠山 そうだ、香くん、これ知ってる？

遠山、手にした新聞をかざす。

東海林 …？

遠山 早刷りの夕刊。見てご覧。ちょっと凄いから。

東海林、新聞を受け取って覗き込む。

遠山 いちおう事件^{ヤマ}研の顧問だからさ、僕。

東海林 「瀬川法務大臣の長男、誘拐さる」…えッ。

塩月 誘拐？

遠藤・薄田 …。

遠山 当局は隠してみたみたいだけど、抜かれちゃったね。

東海林 瀬川って、現職じゃないですか。

遠山 ちよつとないだろ、最近そつという事件。…それあげるから。

遠山、手を上げて去っていく。(退場)

塩月 へえー、三ヶ月前かあ…

塩月、遠藤、薄田、東海林の持つ新聞を覗き込んでいる。

東海林 …あ、ちよつと先生！ 待ってください！

東海林、新聞を薄田に押し付けて追って退場

塩月 あ、東海林さん！…やれやれ。

塩月、追って退場

高村 操さん。あたし、行くから。

藤村 え？

高村 きつとこれは運命なの。こんな近くにいたなんて…。

藤村 えーと…。

高村 ごめんね。

藤村 イヤ、なにが？ あ、おい！ ちよつと。

高村、追って退場

目を凝らして新聞を読んでいる薄田と遠藤。

遠藤 薄田さん…これって…。

薄田 いや、しかし、まさか…。

遠藤 どうします？

薄田 他の新聞だ。

遠藤 ああ。

薄田 とにかく全部買って読んでみよう。行くつ。
遠藤 はい。

薄田、遠藤退場。

藤村 あ、おい、ちょっとお姉ちゃん！ ちょっと待てよ！ おーい！…なんなんだ、
どいつもこいつも…！

取り残される藤村。

振り返る藤村の目に、野間の慈悲じひ深い笑顔。

藤村 …。

野間 …うん。

藤村 なにがだ！ どうすんだよこれから！

野間 帰りましょう。

藤村 なにイ？

野間 メゾン六乗に帰りましょう。

藤村 … 帰りましょうってオマエ。

野間 自分の部屋が一番ですよ。うん。よし。

野間、歩き出す。

藤村 おい！ コラ待て！ 俺を置いていくなッ！

藤村、追って退場。

ACT-5 接近

あちこちで、断片的な会話がかわされる。
(人物の位置取りは登退場で処理する)

【近衛、笹川、渋谷】

近衛のもとに、笹川、渋谷登場。

近衛 見つけたか？

笹川 それが：

渋谷、近衛に耳打ちをする。

近衛 米倉か…。まずいときに…。

笹川 どうします。

近衛 急げ。とにかく犬を見つけるのが先だ。

渋谷 ですね。

近衛 樋口くんはどうした。

笹川 まだ戻りませんが。

近衛 君たちももう一度行ってくれ。頼んだぞ。

笹川・渋谷 はい。

笹川、渋谷退場。

近衛、退場。

【松岡、福本、米倉】

米倉登場。

追って松岡、福本登場。

松岡 米倉さん。

米倉 ……どう？

福本 いませんでした。もう研究所に戻っているかもしれません。

米倉 実験室は？

松岡 特に不審な点はありませんでした。

米倉 そう。…研究所ね、やっぱり。

松岡 ですね。

福本 助教授はどうでした？

米倉 なにも知らないわよ、あの人は。今はまだね…。

松岡 今は？

米倉 一筋縄ではいかない男だから、あれは。瀬川の誘拐事件が表に出たから、もうすぐ全部理解するでしょうね。

福本 それだけのことで？

米倉 ええ、時間の問題よ。

松岡 どういう人なんですか、それって…。

米倉 どうしようもないのよ。病気みたいなもんね。天才っていう名の病気。…そんなことよりさっさと行って。

福本 は？

米倉 は、じゃなくて。あんたたちなにしてきたと思ってんのよ。愚鈍という名の病気にでもかかったの？ さっさと近衛たちを探し出して足止めしてちょうだい。

松岡 ああ、そうか。

米倉 とにかく近衛が研究所でやっていることの、はっきりした証拠をつかむのよ。

福本・松岡 はい。

米倉 誘拐事件が計算外だったわね…。あれでもし誰かが瀬川と近衛の接点にたどりついたら、近衛があたしたちに隠れてやっている実験が明るみにでないとも限らない。その前に始末をつけるのよ。…会社の名前に傷がつく前に。

松岡 マイフロです。

福本 コストでござい…

米倉 ネット合わせは楽屋でやって。ほら、行きなさい。

福本・松岡 了解。

福本、松岡、退場
米倉、別途退場。

【森戸、深浦】

深浦が座っている。

そこへ森戸が登場

森戸 よう。しばらく。…なんだ元気そうじゃないか。

深浦 …。

森戸 さて、なんか思い出してくれたかなあ？

深浦 知ってることは全部しゃべったよ。

森戸 そう？ なんかに忘れてることがあるんじゃないかなあ？

深浦 …。

森戸 瀬川の息子と最後に会ったのは？

深浦 三ヶ月前。

森戸 そのときなんの話をした？

深浦 …くだらない世間話だよ。

森戸 君が呼び出したんだろ？

深浦 何度も言っただろ！

森戸 何度でも聞きたいんだよ。

森戸 (いきなり深浦の胸倉をつかんで) いいかオイ。よく聞け。瀬川の息子が誘拐される直前に会っていた相手、それがオマエなんだよ。自分の立場わかってんのか？ オマエが誘拐犯の片棒担いで瀬川を呼び出した…

深浦 …バカじゃねえのか、アンタ。

森戸、深浦の腹に強烈なパンチを入れる。
倒れ、咳き込む深浦。

森戸 っていう可能性を否定できるか？ ん？ 証明できるのか？ ん？

深浦 …よっぽど…

森戸 なにがおかしい。

深浦は苦しそうに咳き込みながらも笑っている。

深浦 よっぱど困ってんだな、あんたら…。

森戸 …（不気味に笑っている）

深浦 証拠が出ないんだろ…。ええ？ 犯人からの要求もなにもない。だからどうにもならない。おれみたいなどうでもいい参考人足止めして、毎日壊れたレコードみてえに同じ話の繰り返しだ。違うか？

森戸 …頭がいいじゃないか。見直したよ。

深浦 …なんで誘拐ってわかつたんだ？

森戸 …。

深浦 ただの失踪じゃないっていう根拠はなんだよ？ 犯人からなんか連絡があったのか？

森戸 （深浦を介抱するように）…それはなあ…

深浦 …。

森戸、同じ場所に再びパンチ。

深浦 …！

深浦、再度倒れこむ。

森戸、去っていきながら、床に倒れてもがく深浦を見下ろし、赤い帽子があつたんだよ。瀬川の息子が消えた現場にな…。

森戸退場。

【鼓、三木】

三木登場。

追って堤。

堤 三木さん！

三木 …。

三木立ち止まる。

堤 …はつきりさせてください。

三木 なんのこと？

堤 鼓くんのことです。とぼけないでください。

三木 そういえば彼は？

堤 途中で抜きました。四百メートル後ろで吐きそうになっています。

三木 走るの早いね。

堤 高校のとき陸上部でしたから。

三木 あら、あたしもよ。

堤 …。

三木 奇遇ね。話が合いそうじゃない？

堤 そうは思いません。

三木 で？ あたしにどうしろっていの？

堤 その気もないのに彼の気を引くようなことしないでください。

三木 …。

堤 三木さんは楽しいのかもしれないけど、周囲は迷惑です。

三木 あなたも学級委員タイプか…

堤 …。

三木 ねえ、堤さん。あなた信じる？…普通にしてるだけなのに、男の気を引いてる、媚び売ってる、できあがってるカップルにちょっとかい出してかき回す…

堤 …。

三木 トラブルメーカーみたいに言われて、嫌われて、よく知りもしない人から突然悪女呼ばわりされて…それでも自分のどこが悪いのかわからずに、ただオロオロしてた。…中学校のころからずっと。

堤 三木さん…

三木 きつとどつかおかしいのよね、あたしの態度。…でもわかんない！ あんたたちがなに言ってるのか、あたしにはわかんない！

堤 …。

三木 黙ってじっとしてろって言うの？ そんならそうするわよ！ 人に笑いかけるとなっているの？ そんなら山小屋にこもって犬とでも暮らすわよ！

三木、泣き叫んでいる。

堤 三木さん…

三木 あんたがあの子好きなら勝手にすればいいじゃない。あたしに関係ないじゃない！ あの子があんたのこと振り向かないのがあたしのせいなの？ ねえ、そうなの？

堤 あの…ゴメンナサイ…あたし別に…

三木 …もういいわ…あたしが…悪いのよね…それでいいわよ…

堤 三木さん、あたし、そんなつもりじゃ…あの…。ごめんなさい。

堤 いたたまれずに退場
入れ替わりに鼓登場。

鼓 …。

三木 …。

見つめあうふたり。

鼓 三木さん…。

三木 …。

こらえきれずに噴出すふたり。

鼓 趣味悪いよな、まったく。

三木 だってえ、楽しいんだもん。ああいうウブな子からかうのってさ。

鼓 いいかげんにしとけよ。

三木 あの子、あなたにベタ惚れじゃない。ちょっとは遊んであげたら？

鼓 バカ言ってるんじゃないよ。俺はもう降りるからな。オマエの芝居につきあってたらこっちまでおかしくなっちゃっよ。

三木 ダメよ。上級生に届かぬ思いを寄せる純情少年。それがあんなの役どころなの。いいかげんにしないと今にとんでもないことになるぞ。

三木 とんでもないこと……。ソクソクしちゃう。
鼓 病気だよ、おまえ……。

そこへ犬ヨロヨロと登場
その場に倒れる。

三木 タロ？

三木、鼓、駆け寄る。

三木 どうしたの、タロ？

三木、鼓、犬を抱えて退場。
物陰から笹川、渋谷登場。

笹川・渋谷 ……。

三木たちのあとを追って退場。

【遠山、高村、東海林、塩月】

高村、東海林、塩月ドカドカと登場し、椅子に座る。

高村 (見回している)……。

東海林 ……なにジロジロ見てんのよ。

高村 これが麻耶先生の仕事場……。

東海林 だから違うつつつてるでしょ。だいたいここはただのゼミ室。部外者立ち入り禁止なんだからね。

高村 ここで先生は講義をなさるのね。

東海林 なさるわよ、そりゃ。

高村 ……。

東海林 なに遠い目してんのよ。だいたいなんであんたがここにいるのよ。

高村 先生が、お茶でも飲んでいったらっておっしゃってくれたんです。

東海林 だからなによ。

高村 これは運命なの。

東海林 ただの社交辞令！

塩月 東海林さん。

東海林 なによ！

塩月 僕らはなんでここにいますかね。

東海林 なんてって、そりゃ……。ほっとけないでしょうが。

塩月 僕はなんでここにいますらう……。

東海林 知らないわよ。

エプロン姿の遠山が焼きたてのクッキーを持って登場。

東海林・高村 先生。

遠山 クッキーが焼けたんだけど、みんなどう？

塩月・高村 ……クッキー。

遠山 食べる？ 高村さん。

高村、激しく頷いている。

東海林 あのですね、先生、そりゃあクッキーも素敵なんですけれど、あの…

遠山 香くんさ、今クッキー焼きながらちよっと調べ物してたんだけどね。

東海林 はあ。あの、なにを？

遠山 ほら、さっきの誘拐事件。ちよっと面白いよ。

東海林 なにがです？

遠山 瀬川重人。

東海林 …。

遠山 あの人、もう年が年だし、もうじき引退するって決まってるんだよね。

塩月 引退って、政界からってことですか？

遠山 そう。だから法務大臣でいられるのもあとわずかってこと。…でね、面白いのはあの人、この大学に関係あるんだよ。

東海林 関係って…

遠山 大学っていうか…この土地かな。

塩月 土地っていうと…

遠山 楓野丘陵に大学ができる前、つまり太平洋戦争当時ってことだけど、このあたり一帯は軍部が所有してたんだね。いろんな施設があって、軍人が家族ぐるみで住んでいる地域もあったんだ。ちよつど裏の狐の森のあたりに。そこに瀬川一家が住んでいた。

東海林 …え、じゃあ…

遠山 瀬川重人はね、この土地で生まれたんだ。

東海林・塩月 …。

遠山 …高村さんはこんな話つままないかな？

高村、激しく首を横に振る。

遠山 ミステリーに興味あるみたいだから、こついつの好きかももしれないね。じゃあクッキーでも食べながら話してあげるから、僕の部屋行こうか。

高村 行きます。お話、聞きたいです！

高村、激しく首を縦に振る。

遠山 えつと、君たちはどう…

東海林 行きます。行きますとも。

塩月 えつと、僕は…(ぐわしと東海林に腕をつかまれる)いつ…行きます。痛いです。

遠山について、三人とも退場

【薄田、遠藤】

薄田、遠藤、たくさん新聞を持って登場。

薄田 どうよ？

遠藤 どれもこれも同じようなことしか書いてないですねえ。

薄田 そうね。

遠藤 誘拐事件だから…詳しいこと書けないんじゃないですかね。

薄田 なんか接点があるはずよ。深浦とその、瀬川の息子…

遠藤 接点ねえ…。友達だった…とか。

薄田 友達イ？ 深浦と？ 大臣の息子があ？

遠藤 …。

薄田 …。ありうる、か？

遠藤 その、大臣の息子って…

薄田 (新聞を見て) カズシゲ。瀬川数茂、二十三歳…。

遠藤 深浦さんは…

薄田 同い年だ。

顔を見合わせるふたり。

【野間、藤村】

野間の部屋。

野間、ノートパソコンに向かっている。

藤村 どうだよ。

野間 慌てない慌てない。

藤村 誰なんだおまえは。さっさとしろよ。

野間 …。うん…。よし…。と。

藤村 しっかしなんだよこの部屋は…。おまえの部屋はじめて入ったけど、まあ見事にオタク…。

野間 …。

藤村 オタ…お高そつな品物がいっぱいだよ！

野間 32点。

藤村 うるせ！ どうなんだよ！ まだわかんねえのかよ！

野間 (画面を覗き込んで) わかりましたよ。ちょうど二十年前の事件です。赤い帽子の男。通り魔殺人の走りとして当時世間を騒がせた幼女誘拐殺人事件。

藤村 それだな。

野間 遺体が見つかったのがこの森だったんですね。

藤村 知らなかったなあ…。で、犯人捕まったんだろ？

野間 (画面を操作している) ええ、判決は死刑です。

藤村 だろつなあ。ま、死刑にしたところで殺されたヤツが生き返るわけじゃねえけどな…。

野間 生きてますけどね。

藤村 あん？

野間 犯人、まだ生きてますけどね。

藤村 いや、だってオマエ…

野間 死刑判決から十五年。刑が執行された記録はないですね。

藤村 …。

野間 死刑執行っていうのはあまりニュースにならないんですけど、そういう情報専門の裏ネットがあるんです。執行されていればわかります。赤い帽子の男は生きてますよ。

藤村 生きてんのか…。

野間 ええ。刑務所のなかでね。

藤村 …。

【黒沼、湯浅、鍋木】

旧二号館

懐中電灯の光がちらつき、アウトドア三人組登場。声にはかすかにエコーがかかっている。

黒沼 ……どつだ？

鍋木 ……暗いつすね。

湯浅 見りゃわかるよ。

鍋木 こんなところに地下があるんすかね？

湯浅 ある。

鍋木 はあ…。あの、それってなんのためにあるんすかね？

湯浅 アホかおまえは。決まってるだろうが。

鍋木 決まってるんすか。

湯浅 戦争だよ。

鍋木 戦争？

湯浅 太平洋戦争末期、本土決戦を覚悟した軍部が極秘のうちに作った地下要塞だ。

鍋木 ……

湯浅 もちろん公式の記録には残っちゃいない。当時は本土決戦になるなんていう発想自体がタブーだった。敗戦後、建設にかかわった一部の軍人たちは、口を閉

ざしたまま戦犯として処刑されていた。

鍋木 ……

湯浅 ……はー。そして伝説だけが残ったんだ。戦犯たちが収容されていた巣鴨刑務所に伝わる

伝説としてな。

鍋木 ……はー。で、なんでそれがアウトドア研究会に…

黒沼 ……しいッ！

鍋木 ……は？

黒沼 ……誰かくる。

鍋木 ……え。

湯浅 ……明かり消せ！

鍋木 ……え、あ…

湯浅 ……早くしろ！

懐中電灯の明かりが消える。
三人、物陰に隠れる。(退場)

犬を探しているうちに、旧二号館に迷い込んだ樋口、登場。

暗闇の中を恐る恐る進む。

暗闇の奥に、男がいる。
男のかぶっている赤い帽子だけが、ぼうっと光っているように見える。

樋口 ……だれ…？

赤い帽子の男 ……

樋口 ……あなた、だれよ？

赤い帽子の男 …。

樋口 ここだなにしてるの？

赤い帽子の男 …。

樋口 …。

樋口 ここだなにしてるの？

赤い帽子の男 待ってるんだよ。

樋口 … 待ってるって…なにを？

赤い帽子の男 … さあ、なんだったかな…。忘れちゃったな。

樋口 …。

赤い帽子の男 ずっとここにいるんだよ。最初は楽しかったけど、最近は退屈だ。だ

から話し相手が来てくれるのを待っていたのかもね。

樋口 …。

赤い帽子の男 あなたはだれ？

樋口 …。

赤い帽子の男 ここだなにしてるの？

樋口 …。あたしは…樋口、倫子。

赤い帽子の男 ミチコさんは、どうしてここにきたの？

樋口 探してるのよ…。

赤い帽子の男 なにを？

樋口 …… 犬。

赤い帽子の男 犬。

樋口 そう。白黒のブチ。黒くて丸い目。

赤い帽子の男 僕も犬を飼っていたよ。

樋口 そう。

赤い帽子の男 ずっと前。まだ子供のころ。タロっていう犬だった。

樋口 だった？

赤い帽子の男 死んだんだ。

樋口 …… そう。

赤い帽子の男 カズシゲっていうんだ、僕。

樋口 え？

赤い帽子の男 そう。セガワ・カズシゲ。

樋口 …。

赤い帽子の男 … その犬なら、知ってるかもしれない。

樋口 え？

赤い帽子の男 こっち来なよ。いいところに連れて行ってあげる。

樋口 あ、ねえ、待ってよ！

赤い帽子の男、暗闇にまぎれこむように姿を消す（退場）
樋口、迷っているが、追って退場。

アウトドア三人組、登場。

黒沼・湯浅 ……（無言で頷きあう）

ふたりのあとを追って退場。
黒木慌てて追って退場。
明かりが変わる。

アウトドア三人組、再登場。

黒木 ありましたねえ…地下が…。

湯浅 な！ やったな！ な！

黒沼 おう！

湯浅 ついに…おれたちが…

黒沼 粘って大学に残っていた苦勞が報われたな！

湯浅 もうこれで思い残すことはない。

黒沼・湯浅 就職しよう！

湯浅、黒沼、感極まって涙している。

黒木 あの…就職はいいんですけど…

黒沼 なに。

黒木 見失ってます。

湯浅 なにを。

黒木 さっきの人たちですけど。

黒沼 どうだっといういよもう。地下見つけたんだから。

湯浅 な！

黒木 ていうか…あの…、僕ら、帰り道も見失ってるような気がするんですけど…。

黒沼 だいじょうぶだいじょうぶ。

湯浅 ちゃんとホラ、道しるべに紐引っ張ってきたから。

細い紐を見せる。

延々と舞台外まで伸びている。

黒木 あ、さすがですね。じゃあそれを伝っていけば…。

黒沼 そーゆーこと。

湯浅紐を引っ張ってみせる。
手ごたえがない。

湯浅 …。

ために紐を引っ張ってみると、プツリと切れた紐の端っこがすぐに現れる。

湯浅・黒沼 …。

黒木 …あのー、これって…。

湯浅 (黒木に) なにも言っな！

ゴーンと重い鉄扉の閉まる音が響く。

湯浅 なんだ…！

黒木 あの…扉が閉まっています…。

黒沼 見りゃわかるよ！

湯浅 他に出口ないのか！

黒木 さあ…

黒沼 探せ！　すぐ探せ！

わたわたと動き回る三人

別の場所。(舞台前ツラ)

赤い帽子の男、紐の残りの部分を丸めながら登場。
そのあとに樋口登場。

赤い帽子の男 ……なんだかにぎやかになってきたねえ。

樋口 ……なにをしたの？

赤い帽子の男　ネズミが迷い込んで来たから、ちょっと閉じ込めてやっただけ。

樋口　ここ……なんなの？　どうしてあなたは……

赤い帽子の男　さあ、こっちだよ。僕の部屋はもっともっと奥……

樋口　あたし……

樋口、おびえて後退る。
その腕を意外なほどの力でつかむ男。

樋口 ……いやっ、離して！

赤い帽子の男 ……静かに。さあ、こっちだ。もうすぐ面白い見世物が始まるからね。

それまでふたりで話でもしよう。

樋口 ……離してよ！

赤い帽子の男、樋口を連れて退場。

暗転。

ACT-6 恩讐の彼方

遠くに、軍用機の飛行音が聞こえる。
犬が、ぼつんと座っている。
軍医姿の近衛が後ろに立つ。

近衛 気分はどうだ？

犬 …。(ビクっとし、キョロキョロ)

近衛 ああ、そのままでよい。君はここでは客分待遇だ。

近衛、椅子に座る。

犬 …。

近衛 不思議なものだ。君はただの犬だが、われわれ人間の数百倍の価値がある。

犬 …。

近衛 なぜだかわかるかね？

犬 …。

近衛 君の体に潜んでいる力は、地球が誕生して以来、どんな生物も持ち得なかった力だ。生きとし生けるものが、望み、求め、そしてついに手に入れるを得なかった力。そう、権力だよ。君という存在は権力そのものなんだ。

犬 …。

近衛 この戦争は負けるだろう。そして日本はひたすらに腐敗と墮落の坂道を転げ落ちていく。こんなバカげた地下壕をこしらえても、なんの役にも立たない。私にはもうわかつているんだ。

犬 …。

近衛 みんな死ぬ。この計画の発案者である瀬川中佐を始め、関わったものは、みんな…。だがたったひとつだけ、希望がある。それが君だ。

犬 セガワ…

近衛 …。

犬 セガワ…セガワ…オトウサン…

近衛 そうだ、君の飼い主だよ。正確に言えば君の父親の飼い主だ…

犬 オトウサン…イイツケ…マモル…ボク…ボク…ハ…

近衛 さあ、おいで。君は生き続けなきゃならない。君が生きている限り、私は生き続けるつもりだ。君の体の秘密を解き明かすまではね…。

犬 ボク…ハ…

近衛 さあ。

近衛、犬に手を差し出す。

成嶋、登場。

成嶋 行っちゃダメだ。

犬 …。

近衛 成嶋くん。久しぶりじゃないか？ ええ？ 元気か？

成嶋 近衛さん、その犬をどうするつもりですか。

近衛 どうする、とはどういう意味かな？

成嶋 その犬は…

近衛 なんだ？ 言ってみたまえよ。この犬は？

成嶋 僕の…犬です。返していただけませんか。

近衛 おかしなことを言うじゃないか。成嶋くん。この犬はな、陸軍大佐瀬川徳重が、軍命を受けこの楓野丘陵において育てた数百の軍用犬のうちの二匹だ。生後一年と三ヶ月。君はまだ生まれてもいないよ。

近衛、可笑しそうに笑う。

成嶋 …近衛さん、どうか…お願いします…その犬を僕に…

近衛 黙れ！ 口を慎め！ 貴様のごとき若造の出る幕じゃない！

成嶋 …約束したんです。名前をつけてやるって…

犬 …ヤクソク…

近衛 …。

犬 ヤクソク… イイツケ… マモル… ボク… イイツケ… マモル…

成嶋、犬に駆け寄る。

成嶋 おいで。うちに…うちに帰ろう。いっしょに帰るんだ。わかるか？

近衛 勝手なことをするな！

近衛、成嶋を突き飛ばす。

成嶋と近衛、組み合う形でにらみ合う。

犬 …ヤメテ… ヤメテヨ…！…ボク…ボクは…！

声 タロ。

暗闇から声がする。

成嶋と近衛は、組み合った姿のまま、静止する。

犬 …。

赤い帽子をかぶっていない瀬川数重、登場。

瀬川 生きてたんだね、タロ。

犬 ……カズ…シゲ…？

瀬川 そんなはずないか…。タロは死んだ…そうだよな。

犬 カズシゲ…タロ…カズシゲ…

瀬川 タロは死んだはずだ。だって僕は見てたんだからね。タロが死ぬのを。この目で…。

犬 セガワ…ボク…タロ…

瀬川 じゃあおまえはタロの子かな？ そっくりだ、タロに。白黒のブチ。黒くて丸い目。そっくりだよ。

犬 …。

瀬川 父さんが連れてきたんだ…。タロを。おまえの父親をね。僕たちは森で遊んだんだ。毎日毎日。丘の外れの、森のなかで、たったふたりで遊んだ…

犬 ヤメテ…

瀬川 でも飽きちゃったんだ。すぐ飽きちゃったんだよ。僕は。どっしてだろうね。飽きて、退屈して、それで…

犬 ヤメテ…

いつのまにか、瀬川、成嶋、近衛が犬を囲んでいる。
三人の手には、赤い帽子がある。

瀬川 憎んだんだ…。あんなに忠実で、僕になついていた犬を。僕を退屈させて、うんざりさせて、それでも僕を見上げる黒くて丸い目…

犬 ヤメテ…

赤い帽子を持つ三人の手がゆっくりと動き出す。

瀬川 そっくりだよ、本当に。おまえは、夕口に…。俺が…

犬 ヤメテ…

三人はゆっくりと赤い帽子をかぶり終える。

瀬川 俺がこの手で殺した、あの犬に…！

犬 やめるおッ！

犬の絶叫とともに暗転。

三木の声。

三木 ……夕口……夕口！

明かりがつくとそこは三木と鼓の部屋。

三木と鼓が犬を覗き込んでいる。

犬 ……

三木 起きたわ。

鼓 犬も魔まされるんだなあ…。

三木 (呆然としている犬に) どうしたの夕口。あんたずっと魔まされてたのよ。まるで人間みたい…

犬 昌子さん。正解だったね…。

犬の言葉はもちろんわからないので、三木はただ犬の顔を覗き込んでいる。

犬 ボクは夕口だったんだ…。

三木・鼓 ……

犬 ……

三木 なんか、黙りこくっちゃったわよ、今度は。

鼓 考え込んでるな。一心不乱に…。

三木 なに考えてるのかしら。

鼓 そりゃあ…犬だからな…骨とか…

三木 骨？…骨って、なに？

鼓 いや…こういう…(形を手で示す)

三木 ……

鼓 ……なんでもない。

三木 ……不思議よね、最初にこの子を見つけたのも、旧二号館の前だった。しかも、あなたといっしょだった…。

鼓 あ、それで思い出した。なんでオマエはああいう過剰に思わせぶりなことを…
三木 じゃああの場で鼓龍彦とアイビキしてましたあって言っの？

鼓 そりゃあ…ちよつとマズイヤな…。

三木 いいのよ、ちよつとくらい謎があったほうが刺激があつて。

三木と鼓、犬のそばに寄り添って座る。(明かりエリア絞り)

舞台上、別の場所。

深浦を連れだした森戸、その後ろから成嶋登場。

森戸、深浦を突き放すように開放する。

薄田、遠藤、堤が迎えに出る。

薄田、遠藤、堤、深浦退場。

森戸、退場。

成嶋、やや遅れて、退場。

三木の部屋で、犬がポツリポツリと話し始める。

犬 生き物を殺すことが、どうして楽しいのかな？ 人間はどうしてすぐに退屈するんだろ？ 僕にはよくわからない…。

鼓 また鳴き始めたぞ。

犬 よくわからないけど、とても悲しいんだ。どうして人は殺すんだろ？ どうして人は人を殺すんだろ？ どうして…

三木 なんだか、悲しそうな声…。はじめて聞くわ、この子のこんな声…。

三木、犬の肩をそつと抱く。
それを振り返らずに犬は喋りつづける。

犬 僕はとても人間が好きなのに…。僕はずっと信じていた。僕はずっと、守りたかった。約束を…守りたかった…。

人間たちは黙つて犬の声に聞きいつている。

犬 一九四四年七月のサイパン島玉砕のあと、戦局は坂道を転げ落ちるように悪化していった。台湾沖航空戦で二百五十機以上を数えた第一航空艦隊は三十機に激減し、続くレイテ海戦では水上艦艇のほとんどが失われ、四五年硫黄島玉砕に続く東京大空襲で死者は八万八千人を数えた…。

僕たちが生まれたのはそんな時代だった。それでも僕たちは人間を信じていた。僕らの育ての親を信じていた…。

瀬川中佐に子供が生まれたとき、僕はうれしかった。家族が増えて、にぎやかになつて、シゲトと名づけられたその子と僕は犬の仲良しになつた。

戦争が終わり、僕らの生まれた楓野の丘は忘れ去られていった。僕らがいた意味もいっしょに…。でも人々は生き続けていた。シゲトが大人になつて、カズシゲが生まれたときも、僕はそこにいた…。

僕は…ずっと…ずっと彼らといっしょにいたんだ…。

犬、立ち上がる。

三木 タロ？

犬 僕は守らなきゃならない…。あの人たちを…家族を…。それが僕へのいっつけなんだ…。

三木 タロ、どうしたの？

犬 行かなきゃ、僕。

部屋の暗がりについてまにか、笹川と渋谷が立っている。

鼓 誰だ！

笹川 …返してもらおうよ、その犬…

三木 あんたたち！

渋谷 時間がないんだ。悪いけど…

笹川、渋谷、犬に近づく。

鼓 おい！

三木 勝手なことすんじゃないわよ！

犬、笹川たちの手を敏捷に逃れて、身をかわし、戸口へ。

渋谷 おつ。

笹川 逃がすな！

三木 逃げて、タロ！

犬 ありがと、昌子さん。僕は行くから！…あんまりまわりを引っ掻き回しちゃだめだよ！

三木 わかっているわよ！ バカ！ 早く逃げなさい！

犬 じゃあね！

笹川、渋谷、同時に飛び掛る。

犬、身を翻し、外へ。(退場)

笹川・渋谷 …。

犬を追ってふたり退場。

三木・鼓 …。

鼓 …なんだって？

三木 わかんない…思わず、あたし…

鼓 わかっているって、なにが。

三木 …今、あの子が…タロが…あたしに向かって、喋ったのが聞こえた…。

鼓 …。

三木 ううん…ただそんな、気がしただけ…。

鼓 …。

鼓、三木の手をとって、犬を追って退場。

遠山、薄田、東海林、深浦登場。

遠山 ふうん。まあ、無事釈放されてよかったじゃないか。

深浦 おかげさまで。

薄田 先生が弁護士通じて手を打ってくださったって聞いて…ホントにどうもありがとうございました。

遠山 いや、なんにもしてないけどさ、東海林くんから頼まれたから、ちょっとだけね。

薄田 香：あんたいいいヤツ。

東海林 まあ、あたし深ちゃんファンだからさ、あなたの書く芝居は暑苦しいけど。薄田 ほっといて。

遠山 でさ、君に聞きたいんだけど、瀬川大臣の息子さんって、どんな子？ 君、小中高と一緒だったんだろ？

深浦 まあ、そうです。…腐れ縁ですよ。

遠山 ふうん。あんまり好感持ってない感じだけ。

深浦 はつきり言ってる…あいつはちょっと狂ってますね。

東海林 狂ってるってどういうこと？

遠山 疲れてるとこ悪いけど、そのあたり、ちょっと話聞かせてもらっていいかな？ 深浦 ええ、もちろん。

場転気味に。

遠山ゼミ室。

高村、遠藤が加わる。

深浦による数重の話が終わっている。

遠山 ふうん…。

薄田 それは確かにちよっと…

高村 ひどいわね…。

遠藤 ひどすぎますよ！

東海林 お。

遠藤 そんな…勝手に飼っておいで退屈したから殺すなんて…動物を飼う資格ゼロじゃないですか！

東海林 さすが生研。

薄田 でもまあ、正論だわな。

深浦 病気だよあいつは、ハッキリ言って。

遠山 最後に会ったときも、そう感じた？

深浦 …どうでしょう。高校卒業以来だったんだけど…。なんか、興奮してましたよ。

薄田 興奮して？

深浦 なんていうか…楽しいことがあるような…

遠山 なにかそんなこと言ってたの？

深浦 いいえ。口ではなにも。でもわかるんですよ、あいつ。顔つきで…。まるでこれからカーニバルでもあるみたいな雰囲気…。

遠山 なるほど…。で、その刑事の言ったことなんだけど、現場に赤い帽子が落ちてたんだって？

深浦 そう聞こえましたね。

遠山 …。

薄田 赤い帽子って言えば…

東海林 幼女誘拐殺人事件…か。

高村 でも先生、二十年前の事件が今回の事件に関係あるんですか？

遠山 いわゆる赤い帽子の男、岩淵って言ったかな。死刑判決が出て刑務所に入ってそれから十五年…。刑は執行されていない。つまりまだ生きてるんだよ。

薄田 あつ、じゃあもしかしてその男が脱獄して…

東海林 そんなわけないでしょう、脱獄なんかしてたら大ニュースになってるわよ。

高村 でも先生、この前話してくださった瀬川中佐の話と誘拐事件と、どうつながってくるんですか？

薄田 瀬川中佐ってなに？

東海林 このあたりが戦前は陸軍の施設だったって話

高村 その施設でいろんな軍事的研究をおこなっていて、その指揮をとっていたのが

瀬川中佐…。

東海林 今の法務大臣の父親。

遠藤 てことは、誘拐された瀬川数茂のおじいちゃん…。

薄田 その、軍事的研究って？

遠山 いろいろやってみたいだよ。例えば人間以外の動物を軍隊の連絡や警戒、探索に使う。そういうことに向いた種を作り出す…。

遠藤 人間以外の動物？

遠山 たとえば、犬とかね。

薄田・遠藤 …。

塩月、登場。

塩月 あの…先生。

遠山 ああ。待ってたんだ。

塩月 調べてきましたけど。

遠山 ありがとう。ごころうさま。

東海林 調べたって、なにを？

塩月 いやあ、先生に頼まれて…

遠山 で、どうだったかな？

塩月 ええ、やっぱり名前ありましたよ。ええと（資料見る）財団法人老人医学研究所…。

薄田・遠藤 老人医学！

塩月 顧問のところに…医学博士、近衛和夫。

東海林・高村 近衛？

薄田 なに？ 誰それ。

東海林 近衛って、先生。

遠山 うん。君たちにはこの前話したね。さっきでできた瀬川中佐のもとで、様々な実験や改良の指揮を執っていたのが近衛軍曹だった。B級戦犯として巣鴨に収容され、判決を待たずに獄死している。

塩月 じゃあ、この近衛和夫っていうのは…

遠山 息子だろう。

一同、考え込む。しかしさっぱりわからない。

薄田 …なにがどうなってるわけ。

遠藤 じゃああの犬は…

東海林 あたしにきかないでよ。

高村 やっぱりあの犬がなにか秘密を握ってるのよ。
薄田 ジョンが？

東海林 犬がなんだっていうのよ。

高村 だから…宝の埋まってる場所を知ってるとか…

東海林 ここ掘れワンワンじゃないんだから。

薄田 宝ってなに？

深浦 なんか…

一同 …。

深浦 あいつさ、変な犬だよな。

薄田 なにが？

深浦 妙にこっちの言うことが分ってるような気がして。

薄田 …うん。なんかいつのまにか会話しちゃってる。犬ってみんなああの？
一同 …。

そこへ堤、登場。

堤 あのお、先生…

遠藤 あれ。

遠山 ああ。

堤 お連れしましたけど。

遠山 ありがとうございます。ごくろうさま。

遠藤 お連れしたって…誰を？

藤村、登場。

高村 操さん！

藤村 ちゃーす。

高村 どうして操さんが？

藤村 この姉ちゃんにひっぱってこられたの！

薄田 そうだ！ こいつが一番怪しい！

遠藤 ああ、そういえば…

堤 コードネームのこと知ってたし。

高村 人に言えない仕事してるって言ってたし。

塩月 うん、怪しい。

東海林 確かに怪しい。

藤村 ちよつと待って待って！ なんなんだいきなり！ 人呼びつけといていきなり怪しい呼ばわりか？ 冗談じゃねえや、まったく！

遠山 藤村くん、だったっけ。

藤村 そうだよ！ 気安く呼ぶなバーロー！

遠山 ひとつだけ聞いてもいい？

藤村 なにを。

遠山 クロフォォルムかな？ それともバルビツール？

藤村 …。

遠山 凶星かな？

藤村 ……なんでわかった？

高村 なんのこと？

遠山 たぶんバルビツールだね。あれは反射系が麻痺するから。車を避けられなかったんだな。

藤村 ……まいったな、おい…。

高村 操さん？

塩月 先生、今はなんなんですか？

遠山 ……両方とも催眠薬の名前。

塩月 それはなんとなくわかりますけど…

遠山 君たちがその犬を介抱したとき、コードナンバーが見えなかったのはなぜかな？

薄田 え、それはだから…なんていうか…犬だから？

遠藤 答えになってませんよ。

薄田 だからあ！ 犬なんて全身毛むくじやらなんだから、そんなのわかんないわよ、普通！

遠山 そう、それが正解。

薄田 ……？

遠山 彼はね、犬の毛を剃ろうとしたんだよ。いちばんやわらかいわき腹のあたり…だからコードナンバーが確認できたんだ。

遠藤 毛を剃るって…なんでそんなことを？

遠山 練習…だよな？

藤村 おつかねえ先生だなあ…。なにもかもお見通しかよ…。

高村 もう！ なんのこと言ってるの？ 操さんてば！

遠山 よかったら話してくれないかな？ 別に君の職業について文句を言つつもりはないんだ。

一同 ……

藤村 ……森の向こうから、歩いてきたんだよ、あいつ。よく吠える、人懐っこい犬だった。そのときは傷ひとつなかったよ。いっしょに遊んでやって、エサやって、そんでちよつと薬やって…

遠藤 なんでそんなことをする！

藤村 だからあ！ そうガミガミいうなって。俺もまだまだ未熟者だからさ、練習したかったんだよ。

東海林 練習って、なんの練習よ？

藤村 刺青。タトゥー。

一同 ……

藤村 人に言えない仕事ってのがそれ。俺たちのあいだじゃ、けっこつ普通にやっているこつたよ。ちよつと動物に協力してもらつんだ。人間を練習台に使うわけにいかねえだろ？

一同 ……

藤村 眠らせて、毛を剃ろうとしたとき、文字が見えた。小文字の「、大文字のS。数字で0101。

一同 ……

遠山 でも結局…？

藤村 ああ、アイツ目が醒めちまったんだ。それで逃げ出したんだ。驚いたよ。あつというまに二階の窓から飛び出したんだ。びっくりするほど敏捷だった。けどやっぱ葉が効いてたんだな。俺が追いかけたとき、ちょうど車が…。てつきり死んだと思った…。でも生きてたんだな。生きてこの大学の構内にもぐりこんで、あんたらに助けられた…。

一同 …。

遠山 …さて、森の向こうにはなにがある、ということになる。塩月くん。

塩月 はい。…ええと、そうなんです。そのとおり。

東海林 なによ。

塩月 (再び資料を見つつ) 老人医学研究所。住所を見ると、ちょうど狐の森の反対側にあるんです。

一同 …。

遠山 ずいぶん大切な犬らしいね、必死で探してるところを見ると。rS0101か…。…えっと遠藤くん？ 君、生研の部長だって言った？

遠藤 はい。

遠山 小文字のr、大文字のS。思い当たる節はないかな？

遠藤 ……rS…。r淘汰…ですか？

遠山 (ニツコリ) 君、勉強してるねえ。

薄田 (コツソリ) アルトータってなによ？

堤 (キツパリ) 知りません、完全に。

薄田 あんたも生研でしょうが！

遠山 遺伝生物学の分野でね、K淘汰とr淘汰っていうふたつの概念があるんだ。簡単に言うとK淘汰は比較的安定した環境で生き残りやすい性質が有利になるような淘汰。rはその逆で…遠藤くん？

遠藤 …不安定で予測不能な環境に強いものが生き残る、そういう淘汰です。

遠山 そう。そしてr淘汰のほうは学会の慣習で小文字のrで書くんだけ。淘汰はセレクションで大文字のSだね。

堤 予測不能な環境に強い、そういう種類の…犬ってことですか？

遠山 それ以上はなんともわからないね。データが少なすぎる。でも少なくともなにか常軌を逸したことをやっている可能性はあるね。マイフロコスト本社が探りを入れに来たからね。

一同 …。

遠山 さて、こんなものかな？ 高村くん、どう？

高村 え、どうって…

遠山 もしこれがミステリーなら、君はどう考える？

高村 これがもしミステリーなら…。

遠山 そう。これが小説なら君の推理は？

高村 これが小説なら…犬をめぐる事件と誘拐事件が絡み合って全体を複雑にしているように見えるけれど…。

遠山 そう。ふたつの事件を慎重に切り分けて考えると、意外なほどことは単純だ。犬の話と誘拐事件は、ずっと過去、瀬川中佐と近衛軍曹の関係だけが接点になっている。

高村 それは実は作者の目くらしめで、全部切り離して考えると…。

遠山 (頷いて) 考えるべきことはたったひとつ。犯人がどんな得をするか、だよな。犯人? って…なんの?

遠山 決まってるじゃないか。瀬川数茂誘拐事件の犯人だよ。

そこへ、アウトドア研究会の鍋木登場。
けっこうボロボロの状態になっている。

鍋木 あの…すみません。

倒れこむ鍋木を一同が取り囲み助けこす。

鍋木 ちよつと助けて欲しいんですけどよ…。あの、女の人とか捕まってる…

東海林 ああ、あなたアウトドア研の…

鍋木 やばいんですけど…あの、あとふたり、閉じ込められてて、あの…堤 閉じ込められてるって、どこに?

遠藤 女の人って誰?

鍋木 あの…旧二号館の地下に…赤い帽子の男といっしょに…

一同 …。

高村 先生!

遠山 うーん、こういう場合はね。君ならどうする?

高村 どうって…

塩月 どうすれば…

遠山 決まってるじゃない。…警察に電話。

場転。

夕刻、老人医学研究所。

近衛がいる、そこへ米倉登場。

米倉 近衛先生。

近衛 米倉さんか。こんな時間になんの用かな?

米倉 もっご存知だと思いますが。

近衛 …。

米倉 近衛先生。マイフロコストがこの研究所に資本を投下しているのは、先生に好き勝手な研究をさせるためではありませんよ。

近衛 …。

米倉 本社に隠れてなにをなさっておりますか?

近衛 もっごわかってるんだろ?

近衛は米倉に背を向け、窓から見える狐の森を眺めている)

米倉 瀬川大臣の子息が誘拐された事件をご存知ですね?

近衛 聞いたよ。瀬川重人の父親である瀬川中佐…私の父は彼のもとで働いていた。

あの森の向こうでね。

米倉 …。

近衛 私がそれを引き継いだんだ。父親の果たそつとした夢を実現するために…。

米倉 実現したんですか？

近衛 …ああ。

米倉 犬はどこです？

近衛 …。

米倉 先生。事態は急を要します。

近衛 君は本当にあの犬の…あの存在の重大さをわかっているのか？

米倉 近衛軍曹のもとで育てられた軍用犬。そのなかからある特別な種が育てられた。保存されたその犬の遺伝子から作り出されたクローン。それがあなたの犬ですね？

近衛 …まったくわかっていない。…クローン？ そんなものにはなんの関心もない！ そんなことはいつでもできる、誰でもできることだ！ 自然がやっていることを真似してどうなる？ そうじゃない。われわれは、自然には決してできないことをやりとげたんだ。

米倉 …。

近衛 君は生物学のセントラル・ドグマを知っているか？

米倉 獲得形質は遺伝しない。

近衛 その通り。すべての生物に共通する原理。どんな生き物も、自分が生きている間に得た力、知恵、技術を後世に直接伝えることはできない。命はいつでもゼロから始めなおさなければならぬ。それが近代に至って人間が到達した痛々しい真理だった。

米倉 …。

近衛 だがそれは証明された真理ではない。背中に羽の生えた妖精が絶対に存在しないことを証明できないように、獲得形質が遺伝しないことを証明することはできない。たったひとつの反証さえあればセントラル・ドグマは崩壊する。

米倉 …。

近衛 …。そしてあの犬がそうだ。私の父親が作り出した特別な種の血をひく犬。たった一匹残っていたんだよ。敗戦のあと、瀬川家の犬として生き残った一匹。…それがあの犬のもとになった。

米倉 瀬川数茂が殺した犬ですね。

近衛 そう。あのどうしようもないゴロツキのおかげで、偉大なる血統は絶えてしまうところだった。だがその犬の体から抽出された遺伝子から、私は偉大な血統を復活させることができた…。

米倉 近衛先生。

近衛 なんども失敗を重ねたよ。生み出されたクローンはどれも成長できずに死んでいった。だが…

米倉 近衛さん…

近衛 伝えていけるんだよ。

米倉 近衛さん、あなたは…

近衛 あの犬の体にある秘密を解くことができれば…。われわれが現世で得た知恵、力、能力、そのすべてを、次の世代にね。文化や制度という脆弱な作りものを介さずに、直接、体から体へと、伝えていけるんだ。

米倉 あなたは狂っています。

その言葉が合図であったかのように、松岡、福本が速やかに登場。

福本 この研究所における資料、実験成果物をすべて押収し、本社に持ち帰ります。

松岡 この研究所は閉鎖します。

米倉の合図で歩み出る松岡、福本。

近衛 動くな。

米倉のほうを見るふたり。うなづく米倉
動き出すふたり。

近衛 触るんじゃない！

近衛の前に立ちふさがる松岡。
その松岡の胸倉をつかむ近衛。

近衛 貴様ら…。本社の犬どもが！

笹川、渋谷、倒れこむように登場。
ふたりとも息が上がっている。
意表を衝かれた福本らの動きが止まる。

笹川 近衛さん…。

近衛 …。

渋谷 見つけました。大学の…旧二号館へ…

近衛、松岡を突き飛ばし、外へ飛び出す。
米倉、舌打ちして後を追う。
そのあとを福本と松岡が追う。
そのあとを笹川と渋谷が追う。
全員退場。

場転。

旧二号館地下。

ちらつく懐中電灯の光。

黒沼、湯浅登場。

湯浅 どうだ？

黒沼 誰もいないな。

湯浅 あの野郎うまくやったかな…。

黒沼 まあ、今に助け呼んでくるだろ。

湯浅 きっかけ、まるで迷路だな。

数茂の音がする。

声 本土決戦の最後の砦として掘られた地下要塞だからね。簡単には陥ちないよっ
になってるんだよ。

湯浅 誰だ！

瀬川数茂と、縛られた樋口登場。

瀬川 よく脱出できたね。たいしたもんだ。

黒沼 当ったり前だい！

湯浅 アウトドア研なめんなよ！

瀬川 もうすぐ役者が揃うから、ちよつと待っててよね。

瀬川、キラリと光るナイフを手にしている。

黒沼 ……なんか、ちよつとやばいんじゃない…？

湯浅 やい！ そんな危ないもん、しまえ！

瀬川 こういうのあんまり好きじゃないんだけど、君たちバカっぽいから、下手に動かれれると面倒だからさ。

黒沼 なんだとお…。

滴木の声。

滴木 こつちです。たぶん…。

滴木、森戸と成嶋を率いて登場。

黒沼 お、滴木。

滴木 先輩、あの、警察の人…

森戸 瀬川数茂くんか？

瀬川 あんた誰？

森戸 警視庁の森戸だ。君は…誘拐された瀬川数茂くんか？

瀬川 誘拐ねえ…。まあそうだね。そついう役割だったけど…もう飽きちゃったよ。

森戸 ……そのナイフ、下ろしなさい。

瀬川 動くなよ、バカ。この女死んじやうぞ。

湯浅 あいつヤバイよ。狂ってるよ…。

森戸 バカな真似はやめてナイフを下ろすんだ。

成嶋 ぼくが行きます。

森戸 成嶋、よせ！

成嶋 瀬川くん。僕が身代わりになるからその人を放してやってくれ。いいかな？

瀬川 ……やってみなよ、できるもんなら。

成嶋 そつちへ行くよ。

森戸 勝手な真似はやせ、成嶋！

成嶋、ゆつくりと歩き出す。

瀬川 そこで止まれ。…手え上げる。

瀬川、成嶋の体を探り、銃を取り上げる。

黒沼・滴木 あ。

湯浅 やばいだろ、それはやばいだろ。

森戸 あのバカ…。

成嶋、瀬川のそばに立つ。

成嶋 (低い声で) その人を放してやれ。

瀬川 (せせら笑って)……命令すんの。俺に。

刹那、成嶋は瀬川を殴り倒す。

刃物は床に落ちる。

成嶋、銃を取り戻し、樋口を開放する。

樋口は這いずるように森戸たちのほうへ。

成嶋 … やりすぎだよ、おまえ。

瀬川 (倒れたまま成嶋を見上げる) … なんだよなんだよ。汚ねえよなあ。自分だけ
いいところ取っちゃって。だから信用できないんだよなあ、警察官は。
成嶋 動くな。

成嶋、瀬川に銃を向ける。

湯浅・鍋木 あ。

森戸 成嶋！

成嶋 動くんじゃない。

瀬川 なんだよ、俺はもうお役御免じゃないのかよ。ええ？
成嶋 まだだ。

成嶋、瀬川に銃を向けたまま、時計を見る。

森戸 成嶋ア！ なにやってんだテメエ気でも狂ったか！

近寄ろうとする森戸に向けて成嶋は無造作に発砲する。

銃声は地下室の反響で轟音のように人々の耳を聳らす。

銃弾が腕を掠めた衝撃で森戸は床に転がる。

成嶋 動くなって言っただ、エリート。

森戸 なる…しま…！ キサマ…

成嶋 じっとしてる。

近衛、笹川、渋谷登場。

笹川 樋口くん！

樋口 笹川さん！

近衛 犬はどこなんだ？

樋口 わかりません…。

笹川 でも確かにここに逃げ込んだんです。

成嶋 近衛さん。

近衛 成嶋くんか…。

成嶋 奇遇ですね。

近衛 そこにいるのは…瀬川の息子か…。

成嶋 そうです。

近衛 … そういうことか…。誘拐というのは…君が…

成嶋 お察しの通りです。

近衛 バカなことを…。そんなことをしてどうなるんだ？

成嶋 バカは承知です。でも僕はこのために生きてきたんです。

近衛 玉碎覚悟か…。

成嶋 これが終われば、なにも思い残すことはありません。
近衛 …。

成嶋 近衛さん。あの犬…

近衛 …。

成嶋 さっきおっしやってた犬って、あの犬のことですか？ 白黒のブチ。黒くて丸い目。

近衛 ああ、そうだ。

成嶋 もしこれが全部済んだら、一度、あの犬に会わせてくれませんか。

近衛 …。

成嶋 約束したんです。名前をつけてやるって…。

近衛 …… ああ。いいだろう。

成嶋 ありがとうございます。

森戸 成嶋… いったい…

成嶋 まだだ。もう少し…。

森戸 どうするつもりだ！

成嶋 待つてるだけだよ。時間がたつのを…。

遠山、藤村、東海林、高村、薄田登場

薄田 どうなってるの？

藤村 あ、あの刑事…。

高村 どうなってるの？

遠山 成嶋くん。

成嶋 近寄るな！

遠山 近寄るつもりはない。ただ君に知らせにきたんだ。

成嶋 それ以上来るんじゃない。

遠山 たった今、赤い帽子の男… 岩淵静夫の死刑が執行された。正確には今から七分前、三月二十八日午後四時二十三分だ。… 君の勝ちだ。

成嶋 …。

遠山 瀨川法務大臣が執行を命じたんだよ。君の要求通りにね。

成嶋 …。

遠山 成嶋俊平くん…。 そうだね？ そのために君はこの誘拐を仕組んだ。

薄田 俊平…。 あつ。

湯浅 俺の役。

鍋木 じゃああの、妹を殺された…

高村 そうか、そのために法務大臣の息子を…

遠山 狂言誘拐だったんだね？ 君と瀨川くんはふたりでこの計画を仕組んだ。だが

瀨川くんは君の思い通りにおとなしくしてはくれなかった…。

成嶋の胸中は表面上からは計り知れない。

しかしわずかに銃口が下がっている。

隙を見ていた瀨川が銃を持つ成嶋の腕に飛びつく。

そのまま揉み合いになる。

瀨川 (成嶋と組み合いつつ) そういうことだよ！ そろそろ俺にもおもしろいところをくれよ。 ええ？ テメエの復讐物語にいつまでも付き合っっちゃいられないんだよ！

成嶋の持つ銃が暴発する。
一同、悲鳴をあげて伏せる。

成嶋 おまえは…狂ってる。あいつとおんなじだ。赤い帽子の男と…同類だ！

瀬川 ああそうさ。おまえにはわかんないだろう。殺すことの快感は…。権力だよ。自分が神になれる瞬間…何度でも味わいたくなるんだよ。

瀬川の身体が床に投げ出される。

成嶋は瀬川に銃を向ける。

瀬川、落ちていたナイフを掬い上げ、成嶋に向ける。

成嶋 …。

銃対ナイフ。

武器の強弱とは逆に、追い詰められているのは成嶋だ。

瀬川 …ホラ、わかるだろ？ やってみろ…。そつだ…。やってみるよ！

瀬川の恫喝に成嶋の理性が遠のく。
引き金に力がこもる。

犬、登場。

犬 カズシゲ！

近衛 いかん！

犬、瀬川と成嶋の間に飛び込む。

銃声。

犬、被弾し、倒れこむ。

森戸、成嶋に飛びつき銃を取り上げる。

黒沼たちは氣を利かせてナイフとカズシゲを確保。

近衛はじめ、一同、犬を取り囲む。

犬 …カズ…シゲ…家族…守る…僕…僕は…

暗転。

エピローグ

最後の発言者

六乗大学構内、劇研部室。

二年後。
春。

中央に座り込んだ犬が、虫を目で追っている。
人待ち顔の野間、藤村がいる。

野間 (唐突に) たぶん麻耶にとつて小説は仕事ではないでしょうね。彼の作品は事
実上完全な著作権放棄物ですから。

藤村 …はあ？

野間 いや、このセリフ、カットになったんですけど、言いたかったんで。

藤村 さっぱりわからん。だいたいオマエにやってんだ、こんなところで。

野間 藤村さんこそ。

藤村 俺は深ちゃんと待ち合わせ。

鼓、堤、三木登場

鼓 おはようっす。

三木 あら、操さん。

藤村 よう。

堤 ジョン、元気？

犬 …。

藤村 この犬、結局ジョンになったの？

三木 卒業した薄田さんの遺言でね。

遠藤、深浦(留年)、薄田(卒業)登場

薄田 遺言とはなにか？

三木 あら。

薄田 勝手に殺すな。

藤村 よう、来たか。

深浦 うっす。

遠藤 僕は最後まで「ラマルク」主張したんですけどね。

鼓 まだ言ってるんですか、部長。

堤 部長はあなたでしょ。

鼓 あ、そうか。

遠藤 だつてさ、ラマルクこそ、こいつに相応しい…

藤村 (深浦の持ってきた紙片を見ながら) じゃあさ、ガラはこの下絵どおりでいいのね？

深浦 そ。あのね、ここんどこにね、こう…。

薄田 なによ、アンタ。タトゥー入れんの？

深浦 うん。

薄田 よしなよ、親からもらった体なんだから。粗末にしちゃ…。

一同、なんとなく黙り込む。

遠藤 親からもらった体：か。

一同、そろって犬に目をやる。

犬 …。

薄田 ねえ遠藤くん。そのなんとかっていう…生物学者だったけ？

遠藤 ジャン・バプティスト・ラマルク。

薄田 こいつに相応しいって？ どういうこと？

遠藤 ラマルクは、ダーウィンより先に進化論を唱えた学者なんです。でも彼の学説は二十世紀に入って完全に葬り去られてしまった。彼は…獲得形質が遺伝することを主張したんですよ。

薄田 …。

遠藤 キリンが高いところにある木の実を食べようとして必死に首を伸ばす。そのキリンが生きているあいだに二センチだけ首が伸びたとしたら、その二センチは子に遺伝する。そうやってキリンは今みたいに長い首を獲得した…。簡単に言えばそれがラマルクの説です。

鼓 …。

遠藤 へえーって君…生物研究会だろ。

堤 …。

薄田 …。でも、それは間違ってるわけね？

遠藤 ええ、完全に。基本的に僕は親から受け継いだ遺伝子をそのまま伝えることしかできないんです。せいぜいそれを混ぜ合わせて組み合わせを変えることしか。どんなに努力しても、そこに新しくなにかを付け加えることはできない…。

薄田 …。

藤村 …。へっ。俺はそのほうがいいと思っね。妙な執念やら見果てぬ夢やら、そんなもん背負わされてスタートするよりさ。

一同、もう一度犬に目をやる。

犬 …。

犬はあくまでも黙って微笑んでいる。

堤 …。ねえジョンあなた覚えてる？ あなたのお父さんは飼い主のこと守って死んだのよ。

犬 …。

薄田 …。こいつホントに覚えてると思う？ こいつがタロだった頃のこと…

遠藤 タロだったわけじゃないでしょ。

堤 …。でもタロの記憶を受け継いでる…。

藤村 …。全部妄想だったんじゃないの？ あの近衛ってオッサンのさ。

薄田 …。そりゃ、わかんないけどねえ…。

堤 …。わかんないじゃない、そんなの。犬に聞いてみなきゃさ。

犬 …。

深浦 …。無口だよな、こいつ。

三木 おとつさんと違ってね。
犬…。

犬はただ黙って人間たちを見返している。

東海林（すっかりOL風）登場。

東海林 よ。

三木 香さん！

薄田 香！ どうしたの。

東海林 あんた卒業してもまだこんなところに入り浸ってんの？

薄田 大きなお世話よ。あんたこそそんなカッコでなによ。

東海林 今年さ、この大学から二人うちの会社に新人取っていうんで、迎えに来たわけ。チューター。

鼓 新人？

まったく似合わないリクルート姿の黒沼、湯浅登場。

湯浅 お待たせいたしました。

東海林 遅い！

堤 しましまってなに？

黒沼 極度に緊張しておりマス。

東海林 先輩たち来てるのよ、もう。

遠藤 先輩って、東海林さんの会社の？

福本、松岡登場。

松岡 マイフロです。

福本 コストでございます。

松岡 ふたりあわせて

松岡・福本 マイフロコスト…。

福本 …あ、やっと全部できた…！

一同 …。

松岡 まあ、いろいろ学んでもらうことはあるけれど、

湯浅 ハイ。

福本 まず君たちふたりには、今のヤツ覚えてもらおうから。

黒沼 え？ 今のって…

松岡 さあ、さっそくネタ合わせ…じゃなくて会社説明会だ！

松岡、福本、退場。

黒沼・湯浅 …。

湯浅 なんの会社なの？

東海林 いいから行きなさいよ、ホラ。

黒沼、湯浅、頷きあって、決意を胸に、退場。

高村、チラシの袋を持って登場。

高村 野間くん！ こんなところでサボってる！
薄田 あら。

堤 櫻さん、こんにちわー！

東海林 出た。

高村 チラシ！ まだいっぱいあまつてるよ！

野間 うん。

遠藤 まだやってるんだ、立ち退き反対。

薄田 いつになったら立ち退かされるわけ？

高村 知らない。

鼓 だいたい高速の工事ちつとも始まらないし。

野間 立ち消えになったんじゃないですかね？

藤村 不景気だからなあ。

高村 いいの！ 立ち退かされるまでは立ち退き反対！

藤村 なんだかさっぱりわからん。

高村 いこう、野間くん。

東海林 ちよつと待ちなさいよ！ あんた遠山先生の覆面作家説、捨てたんでしょうね！

高村 あら、誰がそんなこと言いました？

東海林 本人、ずつと否定してるでしょ！

高村 やんわりと回答を避けていらっしやるだけです。スマートに。

東海林 性懲りもなく…。

高村 でももう追求するのはやめたの。うるさがられるのはイヤだし、それに、先生

はあたしたちにだけわかる回答をちゃんと出してくださったから。

東海林 それどういうことよ…

高村 ホラ、いくわよ、野間くん！

東海林 あ、ちよつと待ちなさいよ！

高村、退場。

堤 回答って…

鼓 なんのこと？

野間 これ。

東海林 は？

野間 二年間の沈黙を破って最近発表された麻耶汰俱人の新作です。

東海林、冊子を手渡される。

野間 なかなか傑作ですよ。一部差し上げます。では。

東海林 あ、コラ！

野間、退場。

薄田 なに？

一同、冊子に寄り集まる。

東海林 …「権力の…犬」…麻耶汰俱人…

一同 ……

東海林　ちよつと！　こんなもんがなんの証拠になんの！　偶然に決まってるでしょ！

東海林、野間たちを追っかけて退場。

薄田　やれやれ…。

藤村　んじゃ俺らもボチボチ行くか？

深浦　行きますか。

深浦、藤村退場。

遠藤　じゃ、僕らも。

鼓　行きますか。

堤　じゃあね、ジヨン。

遠藤、堤、鼓退場。

薄田　…三木、あんた結局どうなったの、鼓くんと。

三木　とつくに別れましたよ。

薄田　それで？　あのふたり。

三木　そ。鼓と堤でくつついちゃったわけ。

薄田　ふうん。あんたそれでいいの？

三木　今年はガンガン入れますよお。フレッシュで純情な新入部員。

薄田　やれやれ…。

三木　任せといてくださいよ。もと部長。

薄田　お手柔らかに頼みますよ、新部長。

三木、薄田、退場。

部屋には一匹の犬だけが残る。

——白黒のブチ、黒くて丸い目。

犬　……ホントにね。

音楽とともに、

幕。